

〈書評論文〉

中国文化圏の歴史的展開とその特徴

——許倬雲の『萬古江河』を読む——

李 复屏・李 博宇

目次

0. 中国とは何か
1. 中国文化通史の空白を埋める『萬古江河』
 - 1.1 なぜ、『萬古江河』を選んだのか
 - 1.2 著者の許倬雲は誰なのか
2. 中国文化圏の展開：「有給有拿」で「少しずつ」成長
 - 2.1 文化とは何か
 - 2.2 中国文化圏の成長軌跡
 - 2.3 多元的な文化起源
 - 2.4 文化融合：「有給有拿」
3. 比較から見る中国文化の特徴：安定した文化共同体
 - 3.1 中国古代文化と中東古代文化
 - 3.2 秦漢帝国とローマ帝国
 - 3.3 唐帝国とイスラム帝国
4. 再び、中国とは何か
 - 4.1 安定した伝統中国文化圏
 - 4.2 何を継承し、何を取り入れるか

0. 中国とは何か

中国は世界第二規模の経済体として、国際社会での存在感が高まりつつであると同時に、西側諸国との関係も緊張してきた⁽¹⁾。中国は国際社会に融

合していく過程で激しい衝突を防ぐには、関係国間での相互理解が極めて重要である。このような認識に基づき、東西文明（あるいは文化）の比較研究も注目されるようになり⁽²⁾、多くの研究者は中国の動きに関心を示し、その思考や行動原理を伝統思想などの文化から説明あるいは理解しようと試み始めた⁽³⁾。つまり、中国と他国との文化相違への再認識だ。しかし、長い歴史を有する多民族国家の中国の思考や行動原理を理解するには、伝統思想のような文化の一側面からでは限界がある。むしろ地理環境、思想、宗教、生産力、経済や政治体制など、多くの要素が複雑に絡み合いながら長い歴史の中で形成されてきた「まるごと」の文化への再認識が必要である。

歴史学者許倬雲の『萬古江河』はまさにこのような一冊である⁽⁴⁾。この本は、中国文化圏の歴史

↘ peoples-republic-of-china/, Access 2022. 6. 5)。

(2) 例えば、2020年12月12-13日に、北京師範大学で開催された「中西文明比較研究学術研討会」に北京大学、復旦大学、中国華東師範大学、中国社会科学院、中国科学院などの多くの研究機構から40名以上の専門家が出席された（劉嘉仁、商嘉琪、2021）。

(3) 閻（2020）、藩（2021）、益尾（2019）、天児（2021）、趙（2019）などがある。

(4) 『萬古江河』は2006年に台湾で初出版され、2007年に『萬古江河』中国大陸版も出版された。台湾では2020年にオーディオ版が出版された。本稿での紹介は主に2006年台湾版を使用する（以下、『萬古江河』とする）。なお、2006年台湾版と2007年中国大陸版との違いがわずかである。主に20世紀前半の抗日戦争、国民党と共産党との内戦、蒋介石の台湾統治に関する記述において、大陸版は一部の文言を変更や削除した程度である。例えば、抗日戦争の「国軍」を「中国軍」に変更したり、台湾の二・二八事件を記した段落を削除したりしたのである。

(1) アメリカ国務長官 Antony J. Blinken は、2022年5月26日にワシントン大学で行った“The Administration’s Approach to the People’s Republic of China”という講演で、米現政権の政策重点を、「国際秩序に対して長期的な厳しい挑戦」してくる中国におくと明言している。その原文は次のようである。「Even as President Putin’s war continues, we will remain focused on the most serious long-term challenge to the international order – and that’s posed by the People’s Republic of China.」(U.S. EMBASSY & CONSULATES IN CHINA, <https://china.usembassy-china.org.cn/the-administrations-approach-to-the-> ↗

的な展開という視点から、中国文化を世界文化の中に位置づけて描いた貴重な著作である。中国大陸生まれ、台湾と米国の大学で教鞭をとってきた許倬雲は、国際社会に融合していく「この世代の中国人」向けに、「中国文化通史の空白」を埋めるために、この本を執筆されたそうだと(5)。叙述に際して、縦に古代から20世紀中期までの中国文化圏の展開を糸とし、横に庶民の日常生活、経済活動、思想、宗教、政治体制などを珠として綴り、中国文化を一側面からみるのではなく、多方面から全体として捉えている。また、他者を鏡とし己を知るだろうか、著者はいくつかの時代において、その社会「現象」を取り上げて同時代の他文化と比較しながら論じた。

本稿では、『萬古江河』が描いた中国文化圏の展開という略図を概観した後、比較を行われている各「現象」に注目して紹介する。これにより、伝統中国文化と他文化との相違への再認識をはかり、伝統中国文化を理解する最初の一步とした。伝統中国文化の特徴に照らし合わせて近現代中国の姿を筆者たちの目で確認しながら、中国の行方を考えてみたい。『萬古江河』に取り上げられた6つの比較「現象」は、中国古代文化と中東古代文化、秦漢帝国とローマ帝国、唐帝国とイスラム帝国、明代中国とハブスブルク家のスペイン、中国近代革命とロシア革命、中国維新運動と日本明治維新である。ここでは、紙幅の制約で伝統中国文化の特徴がより分かりやすい中国古代文化、秦漢帝国、唐帝国との比較のみを紹介する。

筆者たちは中国文化史の素人であるため、著者の意図を正しく理解できるように、他の関連資料も片手に確認しながら合わせて紹介する。歴史上の人名・地名などへの誤認を避けるために中国語のままで使用させていただく場合もある。それでも筆者たちの力量では誤読・誤訳を完全に避ける自信がなく、間違いをお許し願いたい。もし、このささやかな勉強は文化に基づき中国の行方に関する議論において話題提供できるようであれば、これが筆者たちにとって望外の喜びである。

また、本書は2019年清華大学が新入生への贈

書でもある(6)。大学生の思想教育に力を入れている中国政府は、中国トップ大学である清華大学の学生に何を読ませようとしていることから、中国政府に認められた「中国文化」あるいは習近平政権の提唱する「文化自信」の「文化」の含意を、ある程度イメージできるとも考える(7)。より重要なのは、これからの中国は中国の若者によって作られていくことだ。彼らがどのように中国を認識するかによって、中国の姿が変わっていくからである。

1. 中国文化通史の空白を埋める 『萬古江河』

1.1 なぜ、『萬古江河』を選んだのか

①初心者にとって読みやすい

中国文化や中国歴史に関する本は、おびただしいほどの量が出版されている。しかし、一般読者向けの中国文化通史が意外にも存在しない。長い歴史と広大な国土を有する中国文化の全体図をつかむことは、中国文化の初心者にとって至難な業である。中国文明史として、北京大学は2006年に『中華文明史』を出版した(8)。これは北京大学が文学、史学、哲学と考古学の研究者たちの総力を挙げて共同執筆されたもので、計4巻(日本語訳は計8巻)ある。多分野の研究者たちの共同作

(6) 清華大学学長である邱勇は2015年に学長に着任して以来、毎年新入生に合格通知と同封で贈書を送ってきた。今まで送った本には、小説『平凡の世界』、『瓦尔登湖』、芸術史『艺术的故事』および科学普及書『从一到无穷大』がある(「清華大学校长送给新生『万古江河』, 书中都讲了些什么?」(2019年7月9日), 清華大学新聞, <https://www.tsinghua.edu.cn/info/1182/50096.htm>, 2022年10月17日閲覧)。

(7) 2019年6月16日, 第12期『求是』杂志には習近平総書記の文章『堅定文化自信, 建設社会主义文化强国』を掲載した。この文章には, 習近平が2014年10月から2017年10月までの間に発表した「文化自信」に関する講話6篇を収録している(「堅定“文化自信”, 須讀懂习近平这6篇重要讲话」(2019年6月19日), 新華網, http://www.xinhuanet.com/politics/xjxs/2019-06/19/c_1124642114.htm, 2022年10月22日閲覧)。

(8) これは, 袁行霈, 嚴文明, 張傳璽, 樓宇烈主編『中華文明史』(計4巻) 北京大学出版社, 2006年である。以下では『中華文明史』とする。

(5) 『万古江河』(2007年)大陸版の前書きによる。

業による論文集であるため、一定の学術性が担保されているが、年代や分野によって内容の叙述に濃淡があり、論旨が首尾一貫とした一つのまとまった物語として読みにくい。

『中華文明史』と比較して、『萬古江河』は研究者一人で単独執筆されたもので、論旨明快で、極めて読みやすい。ただし、とてつもなく長い中国文化史を、約460頁の中国語（日本語に換算すれば約700頁程度）の本に詰めるには、多くの詳細を省略せざるを得なかった。その分、中国文化の太い枠組みをつかみやすいが、多分野にまたがる豊富な基礎知識を持たない読者にとって、誤読の可能性も潜んでいる。誤読をなるべく避けるには、『中華文明史』は副読本として力強い存在だと言える。

② 中国文化通史の空白を埋める一冊

『萬古江河』の著者許倬雲は清末のジャーナリスト梁啓超に触発されて本書を執筆されたそうである。許氏は恐らく梁啓超の「中国史叙論」と「新史学」に触発されたであろうことは、許氏の叙述から推測できる。梁啓超は、中国の歴史書が王朝更迭や英雄事跡などを記録したものであって、「真」の歴史書とはいえないと考えていたようだ。「真の史家」は「群衆進化の現象を叙述し、その公理を求め」、「過去の進化を用いて未来の進化を導いていく」ものであり、この意味で「中国には真の史家が存在しない」と梁氏は指摘した⁽⁹⁾。また、梁啓超は自らこのような歴史書を執筆する意欲もあったが、「中国史叙論」で述べられた時代区分の枠組みにとどまり、原稿が未完のままである⁽¹⁰⁾。梁氏の遺志を継いで、「中国史叙論」の時代区分に従い執筆され、「群衆進化の現象を叙述

し」た『萬古江河』は、中国文化通史の空白を埋める極めて貴重な一冊である。

書名『萬古江河』の「萬古」は永久、永遠という意味で、「江河」は文化の喩えである。「『中国』はどこからきたのか」という中国文化を、庶民が分かるように説明してある⁽¹¹⁾。叙述の焦点を、日常生活および種々の観念の由来など中国文化の展開においてある。これは、政治史を中心とする中国「正史」から漏れた、「一般通史の空白を埋める」ためである⁽¹²⁾。王朝更迭、国家興亡および各時代の政治制度などについて、すでに多くの論者によって論じられてきたため、本書は詳しく論じていない。

1.2 著者の許倬雲は誰なのか

このような大著を執筆するに相当な学識を要するにはいうまでもない。著者の許倬雲は中国で名高い歴史学者である。許氏は1930年中国江蘇省に生まれたが、長年、台湾とアメリカでの研究生活を通じて、東西両方の視点を持つ研究者である。氏は1962年にアメリカシカゴ大学で博士学位を取得した後、台湾大学、アメリカピッツバーグ大学で教鞭をとってきた。その間、香港中文大学、アメリカハワイ大学、アメリカデューク大学、香港科学技術大学で、客員教授を務めた経験がある。研究領域は中国文化史・社会史、中国古代史などを中心とする同時に、西洋史への造詣も深い⁽¹³⁾。著作のうち、「Ancient China in Transition」、『求古編』、『漢代農業』、『中国古代社会史論』など単著だけでも40冊近くのぼる⁽¹⁴⁾。

(11) 許倬雲「我为何写『万古江河』」(2007年4月6日), <http://m.aisixiang.com/data/13836.html>, 2022年6月5日閲覧。

(12) 『萬古江河』「序」による。

(13) 『萬古江河』の著者紹介による。

(14) 許氏の著作について、許倬雲著『我者与他者』(香港中文大学出版社, 2009年)の「許倬雲著作目録」によれば、中国語の単著本は33冊、共著本は19冊、編著および共編著本は9冊であり、英語の単著本は3冊、共著本は2冊ある。なお、『中国古代社会史論』(Hsu, Cho-Yun, *Ancient China in Transition*, Stanford University Press, 1968)と『漢代農業』(Hsu, Cho-Yun, *Han Agriculture*, University of Washington Press, 1980)は英語著作の中国語翻訳書である。

(9) 梁啓超「新史学」(『新民叢報』(1902年2月8日~11月14日)に掲載された論考)。この論考は、梁啓超著、湯志鈞、湯仁沢編『梁啓超全集』(第二集, 論著二), 国家清史編纂委員会・文献叢刊, 中国人民大学出版社(2018年, pp.497-505)に収録されている。

(10) 梁啓超「中国史叙論」(『清議報』(1901年9月3, 13日)に掲載された論考で、署名「任公」)。この論考は、前掲書、梁啓超著、湯志鈞、湯仁沢編『梁啓超全集』(2018年, pp.310-320)に収録されている。

著作題目から分かるように、本来中国古代農業史を中心的な研究テーマとしていた氏は、その後社会科学の理論や研究方法を用いて、2000年余りの中国文化の変遷を全体的に捉えようとしてきた。このような研究を行ってきた理由について、氏は次のように語っている⁽¹⁵⁾。歴史研究は時間軸を中心に人類活動の変遷を捉える学問だと考えているからだ。しかし、人類活動のある時点で切り取った断面は、政治、経済、社会、思想など多くの要素が複雑に絡み合っているため、切り離してみることができない。また、人類社会において質的な変化を引き起こす要素の主役は時代によって異なるが、人類社会の変遷はすべての要素が関連しながら変化することに違わない。したがって社会科学の研究手法を借用して多分野から歴史を全体的にみる努力が必要だと。

2. 中国文化圏の展開： 「有給有拿」で「少しずつ」成長

中国文化圏は、中原地域に起源する種々の文化が互いに「有給有拿」（与えることもあり、取り入れることもある）で融合し、少しずつ成長してきたものである。

2.1 文化とは何か

「文化」について、許倬雲は次のように説明している。「人類活動を初めて「文化」と称することができるのは、人類が食糧を生産する能力を有したとき——農耕でも牧畜でも。固定の食糧源があると、人びとは集まって暮らし始め、コミュニティを形成する。人類は協力を通じて他の動物を超越する大きな一步を踏み出す。人類が集まって居住し、固定の食糧源があったうえ、さらに抽象的な思考ができたとき、文明が始まると私

は考えている」⁽¹⁶⁾。

(16) 『萬古江河』p.15。また、文化と文明の定義をご参考に下記2つ列举する。

(1) 木村靖二、岸本美緒、小松久男編（2021年、pp.10-11）には、文化と文明について次のように述べている。

- ◇ 狩猟・採集による獲得経済から、農耕・牧畜による生産経済へ。
 - ◇ 石斧・石臼・石錐・石剣などの磨製石器を用いるようになる＝新石器時代の始まり。
 - ◇ 農耕・牧畜と定住が始まり、余剰生産物の増加にともなって社会の階層分化がおこるなど、社会構造が複雑化して、のちの文明発展の基礎が築かれる。
 - ◇ 雨水を最大限利用する乾地農業、肥料を施さず地力を消費する略奪農業から灌漑農業へ。
 - ◇ 灌漑農業による余剰農産物、人口増、集落が大規模、一部の人が富を蓄積、社会の階層化と職業の文化が進み、大規模集落は都市へ。
 - ◇ 灌漑施設を維持するために、集団を組織化して共通の目標のために労働させる権力の仕組み、すなわち国家が成立する。これによって人類は文明の段階に到達。金属器や文字の発達などといった指標も、実現。
 - ◇ こうして前3000年頃までにはデグリス川、ナイル川、インダス川、黄河・長江の各流域に文明が誕生。
 - ◇ 初期国家の権力は宗教的権威によって維持され、権威を儀礼によって示す場が神殿、神殿は政治の場であるとともに、貢納物を関するための文字を生み出し。
 - ◇ 金属器（青銅器、鉄）は農具のみでなく、武器による征服も可能、国家成立に大きな役割。
 - ◇ 文字が文明成立においてはたした役割も重要。最初は品物や数字をあらわすため考えだされ。文字は神殿の農産物記録、それによって人類は政治や商業などの過去の記録を参照して将来の行動に備えることができるようになる。複雑で抽象的な思考もできるようになる。人類史は歴史時代（historic age）に入っていた。
- (2) 日本国語大辞典第二版編集委員会（2001）『日本国語大辞典』（第二版、小学館）は、文化と文明を次のように定義している。
- ◇ 文化：自然に対して、学問・芸術・道徳・宗教など、人間の精神の働きによって作り出され、人間生活を高めてゆく上の新しい価値を生み出してゆくもの。
 - ◇ 文明：【名】文教が盛んで人知が明らかになり、精神的・物質的に生活が快適である状態。特に、宗教・道徳・学問・芸術などの精神的な文化に対して、技術・機械の発達や社会制度の整備などによる経済的・物質的文化をさす。

(15) これは、許倬雲がアメリカピッツバーグ大学での講演「文化史：社会学和歴史学的の交集」（文化史：社会学と歴史学の交差）で語ったことである。この講演で氏は自身の研究分野、研究方法およびこの研究分野に関心を持った理由について、詳細に語っている。講演は2019年9月23日に中国のSNSbilibiliで投稿された80分間の動画である。bilibili 動画、<https://www.bilibili.com/>、2023年10月2日閲覧。

また、「中国文化」について、「歴史の進展とともに、中国文化の内容およびその占有空間は絶えず変化している」と許氏はいう⁽¹⁷⁾。歴史学者の葛兆光も同意見である。「一つの文化世界としての「中国」は不易不変ではなく、徐々に中心（黄河と長江の中流，下流）から四方に向かって広がっていった空間であって、「中国文化」も単一の文化ではなく、漢民族文化を核心として徐々に種々の文化を融合して形成された共同体なのである」⁽¹⁸⁾。

2.2 中国文化圏の成長軌跡

内容および占有空間が絶えず変化する中国文化は、どのような変遷をたどってきたか。

『萬古江河』で描く中国文化史は、「開放的で多元的で複雑である。これは、中国文化中心論とかなり異なる。中国文化の特徴は、優秀な文明で四隣を啓蒙や同化することではない。中国文化の真の誇りは、その包容力と消化力にある」と⁽¹⁹⁾。つまり、許氏は中国文化が種々の文化との融合過程での「有給有拿」を強調している。

また、中国文化圏が最初から大きかったわけではなく、「少しずつ」成長してきたという。その成長過程を、梁啓超の考えに従った『萬古江河』の章別編成に確認できる。梁啓超は中国文化圏が絶えず拡張していく過程を、中原の中国から、中国の中国、東アジアの中国、アジアの中国、ないし世界の中国へとみていた⁽²⁰⁾。以下では各章の題目のほか、その時代に対応する王朝名および時代特徴を示すキーワードを筆者の理解で付してみた。各比較「現象」は中国のどの時代にあたるかを認識しやすいように、ここにも提示した。

一 古代以前：中国地域考古概説

【時代】旧石器時代，新石器時代⁽²¹⁾

(17) 『萬古江河』「序」による。

(18) 葛兆光 (2021), p.138。

(19) 『萬古江河』「序」による。

(20) 岡本隆司，石川禎浩，高嶋航編訳の『梁啓超文集』（2020, pp.147-175）に収録されている梁啓超の「中国史序論」日本語訳による。

(21) 『中華文明史』（第1巻，pp.31-54）によると，中国における新石器時代はおよそ1万年前から4000 〆

【特徴】集居，食糧生産の能力獲得，多元的な文化形成⁽²²⁾

【比較】中国古代文化と中東古代文化の比較

二 中国文化の黎明（前十六世紀～前三世紀）

【時代・王朝】青銅時代（夏⁽²³⁾，商⁽²⁴⁾，西周⁽²⁵⁾，

〆 年前までの間である。「この時代の基本的な特徴は農業と牧畜業の成立であり，磨製石器・陶器・紡績の出現である。厳格に言えば，この時代は自然の恵みに頼っており，生産経済にいたる過渡的な段階」である（pp.2-3）。中国は約1万年余り前，農業が出現した。前7000年前後に，長江と黄河の中・下流域および遼河流域で最初の農耕集落が出現し，稲作と粟作という二つの農業地帯が形成された。前4000年後，磨製石器と陶器が発明された。この二つの発明は人類史上，新石器時代の主な指標となっている。前4000年前後から前2000年の夏王朝成立までの間は，社会の生産力が飛躍的な発展を遂げ，社会も複雑化・階層化・文明化への発展が加速した。

(22) 新石器時代の代表的な文化は，黄河流域の仰韶文化，竜山文化，長江流域の河姆渡文化，良渚文化，遼河流域の紅山文化などがある（木村靖二，岸本美緒，小松久男編，2021, pp.86-87）。

(23) 中国では二里頭遺跡は殷王朝以前の遺跡とみられており，これを司馬遷の『史記』に記載されている夏王朝実在の証拠とする見方が主流である。確かに，二里頭遺跡で発見された中庭式の宮殿や祭器はのちの中国王朝が重んじたものと同じであり，すでに殷以前に何かしらの王朝が存在していた可能性は高い。ただし，殷の場合は，甲骨文字の発見によって歴代の王の実在が証明されたのに対して，二里頭遺跡ではまだ文字が発見されておらず，司馬遷の『史記』に書かれた夏王朝が実在したことを証明する事実はまだみつかっていない（木村靖二，岸本美緒，小松久男編，2021, p.88）。

(24) 前3000年後半から前2000年頃にかけて，竜山文化は各地の文化を吸収しつつ発達して前2000年頃に二里頭文化へと発展する。この二里頭文化を継承して発展した二里崗文化が，すなわち商（殷）前期の文化であり，黄河文明を生み出すのである。また，殷人は青銅器の鑄造について世界でも類をみない発達を遂げた。長江流域の三星堆遺跡で発見された青銅期も殷の影響もみられる（木村靖二，岸本美緒，小松久男編，2021, pp.87-89）。

(25) 周は「封建」制をとる。王と諸侯とは多くの場合血縁で結ばれており，この点で西欧中世の「封建feudalism」とは意味が異なる。また，諸侯・郷・太夫・士といった身分秩序を定め，長子相続や宗法などの宗族に関する諸制度をつくった（木村靖二，岸本美緒，小松久男編，2021, p.90）。

東周（^{しゅんじゅうせんごく}春秋 戦国）⁽²⁶⁾

【特徴】北方儒家と長江流域の道家が融合して、中国思想形成

三 中国の中国（前三世紀～二世紀）

【王朝】秦、西漢（前漢）、東漢（後漢）

【特徴】秦漢帝国の「天下国家」体制形成
精耕農業と市場網と郡県制は中国文化の特徴となる

北方遊牧民族との衝突と対抗
仏教の伝来と儒道との融合

【比較】秦漢帝国とローマ帝国の比較

四 東アジアの中国（二世紀～十世紀）

【王朝】魏晉南北朝、隋唐

【特徴】四隣民族の中国進入による民族融合は新しい文化が生まれ、中国式衣食住が大きく変化、中国人の生活様式の基礎が形成

【比較】唐帝国とイスラム帝国の比較

五 アジア多元的体系の中国（十世紀～十五世紀）

【王朝】北宋、南宋、遼、金、元、明

【特徴】他民族の挑戦と融合が頻発、モンゴルの西征は中国と西方との間に大きな融合地域が生まれ、経済網が拡大、中国思想の多元化と整合

六 世界体系に融合していく中国（上）（十五世紀～十七世紀）

【王朝】明、清初

【特徴】航海と欧亜大陸の陸上交通が中国を世界経済体系に、貿易黒字は中国经济の成長を三百年間持続させ、外来文化の刺激で中国知識界は中国文化を再考、これはヨーロッパの文芸復興に相当にする努力、努力が挫折

【比較】明代中国とハプスブルク家のスペインの比較

七 世界体系に融合していく中国（下）（十七世紀～十九世紀半ば）

【王朝】清

【特徴】急速に発展する西方と停滞する中国、中古から形成されてきた中国文化体系が旧習墨守^{ぼくしゅ}、知識界の中国文化への再考も継続できず、中国伝統文化と伝統政治制度が維持できた最後の時代

八 百年蹣跚^{まんさん}（十九世紀半ば～二十世紀半ば）

【王朝・国名】清末、中華民国、中華人民共和国

【特徴】西方工業革命と資本主義帝国の拡張は世界の運命を主宰、この圧力で中国崩壊、内部からの検討と反省および外部への学びと模倣で中華文明は支離滅裂、中国は再度自己整理、整合の道へ

【比較】中国革命とロシア革命の比較

中国維新運動と日本明治維新の比較

2.3 多元的な文化起源

中国文化はどのように融合してきたのかを、まず多元的な文化起源から見る。

中国文化の起源について、許氏は考古学者蘇秉琦の「六大文化圏」を紹介してある⁽²⁷⁾。蘇秉琦は、中国地域の考古文化を6つの区系に分けた：①燕三、長城南北を中心とする北方、②山東を中心とする東方、③関中、晋南、豫西を中心とする中原、④環太湖を中心とする東南部、⑤環洞庭湖と四川盆地を中心とする西南部、⑥鄱陽湖——珠江デルター線を中心軸とする南方。今日の「中国」の境域は上述の6つの文化圏空間を超えている。また、蒙蔵、中亜、西南山脈および沿海島嶼

(26) 春秋時代に天下を内なる諸夏（華夏）と外なる夷狄に分ける華夷思想が生まれ、自らを「中国」と認識し始めるようになる（木村靖二、岸本美緒、小松久男編、2021、p.90）。

(27) 『萬古江河』pp.22-30。また、「六大文化圏」の詳細について、「蘇秉琦の中国文化六大区域划分理论是什么？」が詳しい（騰訊網 <https://new.qq.com/rain/a/20210612A0453600>、2022年10月6日閲覧）。

は各自の文化圏を有していた。蘇による文化体系は、中国新石器文化遺跡の分布が最も密集している地域である。資料が多いのみならず、発展の足跡も明晰である。

これら六大文化圏は新石器時代に融合して、夏商周「三代」文明の主流となった。3000 年余り前、周の時代に、中原の華夏と東方文化と融合し、黄河流域の主流文化となった。その後、楚文化は江南と南方文化と融合し、長江流域の主流文化となった。さらに後で、東南の呉越文化は黄河・長江二大主流文化に挑戦したこともある。中国本部のいくつかの大文化圏は秦漢時代に融合し始めた。今日に見られる中国各地域の文化の相違は、新石器時代に遡って求めることが可能である。

『中華文明史』は、中国新石器時代期の文化圏を燕遼文化区、甘青文化区、山東文化区、中原文化区、長江中游区、江浙文化区という 6 つに分け、これら 6 つの独立した文化圏はその後融合して多元一体的な中国文化圏を形成したと述べている⁽²⁸⁾。

2.4 文化融合：「有給有拿」

文化融合は物品の交流、民族間の往来、宗教の伝来などにおいて「有給有拿」（取り入れと与え）によって行われてきた⁽²⁹⁾。その例をいくつか見てみる。

①物品の交流⁽³⁰⁾

車、冶煉青銅と鉄に関する知識は、恐らくシルクロードから東アジアに伝わってきたであろう⁽³¹⁾。シルクの輸出は漢代にすでに始まったが、同時に西方から葡萄、スイカ、胡琴、魔術も輸入した。また、麦類作物も新石器時代末期に西亜から中国に伝来したものである。東漢以前、中国人

は麦類作物の粒食を主としていたが、東漢時代に西域から学んだ粉食はすでに普及し、水磨などが大量に出現した。この食革命で大麦、小麦は黍稷^{しよくとうりょう}と並んで中国北方の主要食糧となった。

②民族間の往来⁽³²⁾

秦漢時代は西方と西域三十六カ国、北方と匈奴、南方と百越、南北朝時期には鮮卑・羌との交流が相当に多かった。西晋時代に、漢族の文人士大夫である江統は各民族が雑居し融合する状況に危機感を感じ、『徙戎論』を著して警戒するよう注意喚起した。北方の胡漢融合（胡は中国の西方と北方に住むペルシア系民族の総称）のみならず、南方も同様に民族融合が進んだ。隋唐時代になると、突厥・吐蕃・回紇が次々に台頭し、人々が移住するようになり、中国はすでに胡と漢の融合した文化共同体となっていた。

③宗教の伝来⁽³³⁾

インドや西域から伝来した仏教、本土で興った道教、中央アジアやより遠方から中国に伝わった 3 つの夷教（ゾロアスター教・景教（ネストリウス派キリスト教）・マニ教）は、互いに衝突し、また互いに混じり合うようになった。次々に中国に流れ込んだ種々の外来宗教は既存の教えである儒教に危機感を抱かせた一方、危機感から生じる抵抗の中で徐々に融合して新しい思想と文化を形成した。

ほか、芸術の交流もあった。莫高窟^{ばうこうくつ}の塑像と壁画は東西文化交流の情景を残した⁽³⁴⁾。疫病も西方から中国に進入し、東漢時代に大疫病の流行が多かった。また、中国文化は朝鮮、日本、ベトナムなど東南に広がったことが周知の通りである⁽³⁵⁾。

(28) 『中華文明史』（第 1 巻），pp.54-56。

(29) 『萬古江河』に挙げられている文化融合の例を他の文献に確認した場合、本稿は他の文献の記述を参考にまとめている。

(30) 『萬古江河』（pp.114-117）による。

(31) 『萬古江河』（pp.114-115）によれば、中国地域はいつから車両を使用したのかがまだ定説がないが、おおよそ 4000 年余り前だと推測される。

(32) 葛兆光（2021 年，pp.124-126）による。

(33) 葛兆光（2021，pp.126-127）による。

(34) 『中華文明史』（第 3 巻），p.71。

(35) 『中華文明史』（第 3 巻），pp.145-159。

3. 比較から見る中国文化の特徴： 安定した文化共同体

中国文化の特徴と言えば、まず脳に浮かんできたのが長期安定である。その安定の理由は、中国文化を他文化と比較すれば見えてくる。

3.1 中国古代文化と中東古代文化⁽³⁶⁾

中国各地の文化融合後、商周の整合を経て中国北方に強い王国が出現した。春秋戦国時代に中国文化圏およびその政治秩序領域が拡大し、その範囲は北方では草原地域に近づき、南方では長江を超えた。この時期に中国文化の主な特質がすでに現れた。その後の2000年余りで中国文化は絶えず成長、変化してきた。ほぼ同時代に、中東地域に両河流域とナイル川流域という2つの古代文明があったが⁽³⁷⁾、その後2つの古代文明は拡大して持続的な文化圏となれず、ペルシア文明とギリシャ文明に取って代われ、歴史舞台から降りた⁽³⁸⁾。ここでは中国古代文化と中東古代文化の違いを、地理的環境、文字、宇宙観や思想から比較してみる。

①地理的環境

【中国】：超えられない障壁がない

北方の黄河流域は晋陝甘黄土高原、中下流の黄土平原、渤海湾沿岸の沖積平原という3つの地域からなる。この地域に山地があるが、越えられないものでない。南方の長江と漢淮地域に河川湖泊が多く、山もあるが、それも越えられないものでない。南北の長江・黄河両流域間の文化が異なるが、互いに接触しながら徐々に融合してきた。

【中東】：高山や砂漠という越え難い障壁がある

中東の地理的環境が中国とかなり異なる。両河流域の北に高山、南にアラビア砂漠があり、いずれも越え難い障壁である。ナイル溪谷にあるエジ

プト両側にも高山があり、その外側は砂漠か山地である。両河流域とエジプトの面積合計は、古代中国の江河漢淮地域に相当するが、両河流域とナイル川流域の間に大きな砂漠があり、沿海通路も通過困難であるため、両文明は接触困難であった。

②文字

【中国】：中国地域の文字は象形文字である。文字の起源は恐らく新石器時代に遡り、商周時代に一系統の文字となった。南北文化が接触した時、南方に独自の文字があった可能性もあるが、北方の文字を受け入れた。

【中東】：中東の各地域文化にそれぞれ独自の文字系統が存在した。両河流域の楔形文字の原型は図形だったが、多くの民族に借用され音節文字となった。エジプトの象形文字の出現時期は両河流域より遅く、造字原則も全く異なるため、両者はそれぞれ独立して発展し、始終融合できなかった。

③宇宙観や思想

【中東】：二元対立の宇宙観

両河流域は、淡水・苦水、農耕・牧畜、光・暗、生・死などのように調和できない対比と対立という宇宙観を持ち、ゾロアスター（Zoroaster）が提唱した二元信仰は中東宗教の基本観念となった。後のキリスト教の死亡・復活、善・悪もここに由来したと言える。

ナイル流域（古代エジプト）の宇宙観は両河流域のそれと異なる。各地域に各々の神が存在するが、神たちは同一体系に属し、役割が異なるのみである。日夜、生死は対立と衝突する存在でなく、互いに輪廻して持続していくものである。ただし、新王国時代にエジプトは外に拡張し異文化との接触過程で、これらの観念が徐々に影響力を失ってしまった。

【中国】：二元融合の宇宙観

中国古代に、中東の両河流域と全く異なる宇宙観を形成した。中国の基本観念は二元融合的なもので、すなわち陰陽、男女、上下、動静などが対立しながら補完しあうのである。この点におい

⁽³⁶⁾ 『萬古江河』（pp.85-90）「2 中国文化の黎明（前16世紀～前3世紀）」による。

⁽³⁷⁾ 両河流域はティグリス川・ユーフラテス川地域である。

⁽³⁸⁾ ペルシアとギリシャの都市国家は、中国の春秋戦国とほぼ同時代である。

て、ナイル流域の宇宙観と相似している。この宇宙観は、相反するものが相互に変化しながら対立という矛盾を解消していく包容力がある。ゆえに異なるグループの人びとが共存できたと考えられる。また、春秋時代に出現した孔子の「仁」という考え方は、生死・善悪という人間終極的な関心を示したものであるため、思想面における大きな突破だと言える。孔子の「仁」は完全なる人格だと理解できる。人びとは生まれつきの人格を育てて「仁人君子」（筆者注：仁徳のある人）になるのが大切であり、すべての人が自身の「仁」を見つけ出し、「仁人君子」となれば社会もよくなると孔子が考えた⁽³⁹⁾。

総じて、中国では南北の長江・黄河両流域間に越えられない地理的な障壁がないため、南北文化が接触する過程で同一の文字を用いて融合してきた。二元融合的な宇宙観と孔子の「仁」は、中国の社会秩序を支える基本思想体系となった。中東地域の高山や砂漠は、両文明が接触する障壁となり、両河流域の二元対立的な宇宙観と音節文字も文化融合への助けにならなかった。

3.2 秦漢帝国とローマ帝国⁽⁴⁰⁾

秦漢帝国とローマ帝国は同時代に存立してい

た。両帝国の間に接触がなかったものの、秦漢帝国はローマ帝国を「大秦」と称して、互いにその存在を認識できた。シルクロードの始点は中国にあり、その終点はローマにある。両帝国の成立における共通点として、文化統一は政治統一より早いこと、武力征伐で領地統一を果たしたことが挙げられる。ここでは主に両帝国の異なる点を確認する。

①征服地への統治手段：文官と駐軍

【秦漢帝国】：文官による統治

秦は六国を滅亡しても、秦は諸侯に滅亡されても、新しい統治者は文官を派遣し行政を行った。駐軍による統治をしたことがない。漢も同様である。その後の中国歴史の中で、外族は中国を征服したときのみ、中国の中心地域に軍隊が駐屯して統治を行った。例えば、金代の猛安、蒙元のモンゴル軍、清代の各旗などである。

【ローマ帝国】：駐軍による統治

ローマ軍は本国農民によって組織され、征服地でそのまま統治層となる。ローマ民は次々とイタリア半島から離れ、新たな征服地の住民となったため、イタリア半島の人口が徐々に減少し、奴隷を輸入して生産を担わせた。これによりローマ帝国本部の人口成分も常に変化し、奴隷にローマ公民の身分を与えることも屡々行われてきた。これもローマ帝国が始終駐軍による統治から脱出できない体質によるだろう。

②統治体制：郡県制と宗主国

【秦漢帝国】：統治体制における中国の特徴と言えば、郡県制であろう⁽⁴¹⁾。春秋時代、秦、楚、三晋とも領土拡大の過程で、領地の世襲制を実施せず征服地に文官を派遣し統治を行った。秦は統一する以前から、七国にすでに郡県二級制という地

(39) 『萬古江河』（pp.66-67）。小島（2017, p.57）は、孔子の「仁」に関する多くの解釈のうち、『中庸』の「仁、人也」（仁は人となり）というものが最も適切であるという。すなわち仁をもって人の人たる所以と解するものである。また仁の内容は愛の一字に尽きると。佐野（2022, pp.60-61）も、仁とはまごころや愛に基礎をおく精神性・道徳性を意味する中国思想史上の概念であり、徳目として儒家が特に重視したものであると説明している。また「仁」の字形は、もともと「人+二」で人が互いに親しむさま、あるいは人が數物の上で寛ぎ和むさまなどを表したとされる。『論語』では仁が「言行一致」「人を愛すること」「私欲を抑制して礼の規則を守ること」など様々な言葉で説明されており、徳目の中でも、包括的・根源的な性質を持つものと認識されていた。孔子の後も、中国思想において仁は重要な概念であり続け、多くの思想家によってその内容を発展させた。

(40) 『萬古江河』（pp.136-142）「3 中国の中国（前3世紀～2世紀）」による。

(41) 藩岳（2021, p.79）によると、秦漢は文官制度を採用し、下層から人材を抜擢・育成し、「平民精神」を持った王朝を作り出そうとした。その文官制度は上層と末端を直接結びつけ、中央から県郷までを貫通するものである。官衙の責任で末端から集められた人材は、厳格な審査を経て地方に派遣され、徴税、民政、司法、教育を全面的に管轄した。

方行政制度があった。秦漢の地方長官は通常本籍人が担当できず、中央から派遣した刺史^{しし}は地方官員を監察する体制であった。この支配体制のゆえに、統治は軍隊に頼る必要がない。

【ローマ帝国】：ローマ帝国の統治体制は秦漢帝国とかなり異なっていた。ローマ帝国本部の地中海地域は汎ギリシャ文化であるが、周辺地域の中東およびヨーロッパ大陸の民族や政治単位、政治体制が異なるため、ローマ軍団の征服地はそれぞれ異なる状況にあり、中国のような郡県制を構築できなかった。ローマは現地の有力勢力と協力し、宗主国として軍隊に頼って各属地を統治するしかなかった⁽⁴²⁾。

③共同体の構築：同質文化と異質文化

【秦漢帝国】：儒家思想と視覚文字による教化で文化共同体を維持する

中国は儒家思想と漢字により域内で高い文化同質性を保持できたため、政治権力が更迭されても文化アイデンティティで共同体を維持できた。

戦国時代は思想が百家争鳴だったが、主流思想は儒教であった。秦は法家で治国していたが、法家も儒家の変種に過ぎない。漢以降は「外儒内法」（筆者注：仁政重視の儒家と法制重視の法家との併用）を統治の根本とした⁽⁴³⁾。儒家士大夫は政治・社会的優位性を利用して儒家思想教化を推進したため、民俗文化も儒家思想と融合できた。辺鄙の地域でさえ地方官は絶えず教化に尽力した⁽⁴⁴⁾。中国の視覚文字は各地方言の隔たりを克服するにも十分だった。

【ローマ帝国】：ラテン語を読めない大衆、多宗教・多文化で文化共同体構築が難しい

キリスト教が広がる前、ストア派（Stoicism）思想はローマ上層階級の主流であった。この思想

は中国の儒家思想と実に類似している。しかし帝国を軍事で統治するローマは、教化による主流思想の形成に積極的でなかった。また、ラテン文字は音節文字で、ローマ帝国とその属地の上層階級はラテン語を読めたが、下層階級の大衆は通常文字を読めない。したがって、ラテン語は教化の道具になれなかった。

コンスタンティヌス大帝（Constantine I, 306-337）以降、キリスト教は勢力を得て、異質的なローマ帝国を結集して同質的な文化共同体を構築することも可能だったが、その束の間に東ローマにギリシャ正教が生まれ、後に中東のイスラム教が興り、帝国領域内で異なる文化共同体を形成した。後の外来民族はキリスト教から本族アイデンティティへの回帰により、ローマ帝国が解体され、キリスト教文化共同体も改変された。ヨーロッパはついに多文化、多民族の列国体制となった。ローマは時代とともに、中国のように王朝更迭ではなく、換骨奪胎された。

④異なる宗教や信仰への寛容さ：儒仏道合一と一神教キリスト教

【秦漢帝国】：儒仏道が共存・補完しあう

中国主流思想である儒教の関心は人間にあるため、形而上および宗教的關懷の空間を残した。この空間は道家による新興道教と外来の仏教によって埋まり、儒家思想は仏教、道教の両宗教と相互に補完しながら共存できた。また、中国の士大夫は君主権力と対抗・協力の関係にある。士大夫は儒家理念で政権の権力を抑止すると同時に、専門文官として政権に仕える。儒家の理想社会は天（筆者注：宇宙）にあるのではなく、それを人間社会に求めたため、儒家士大夫は官職を終えた後も、郷紳^{きょうしん}と知識人として官民間の調整役割を果たし続けた。この官民間の役割において、郷紳はおそらくキリスト教士より深く関わる事ができた。したがって近代以前、儒仏道合一の下での中国庶民の精神生活はローマ治下（ヨーロッパ諸国）の庶民ほど抑圧されていなかったかもしれない。

【ローマ帝国】：一神教キリスト教は排他的である

(42) この点について、藩岳（2021, pp.78-81）も同じ指摘している。

(43) 筆者の理解では「外儒内法」とは伝統中国統治の基本思想である。倫理上、仁政を重視する儒家思想を提唱するが、実際、法制を重視する法家思想で行政を行う。つまり、儒家と法家を併用して統治を行うのである。

(44) 藩岳（2021, pp.77-78）によると、漢は地方に学校を作り、經学者に典籍（經書）を教えさせた。

ヨーロッパ全体はキリスト教という一神教の世界となった後、キリスト教の強い排他性のため、他の宗教や信仰を包容できず排除してきた。したがって、君主・武士・教士は三角統治集団となり、協力しつつも対抗していた。教会の勢力が強く、教士は文官だとも言えるが、中国のような専門文官システムが存在しなかった。

⑤経済圏：広域交易網の安定さ

ローマ帝国と秦漢帝国は、それぞれ広域な交易網を構築できた。

【ローマ帝国】：固定した広域交通網がなく、交易は各域内で完結できる

「すべての道はローマに通ず」という諺は、イタリア半島およびその北部にある西東大道のみをさしている。地中海の航路は港から港までいけるが、固定した交通網でない。地中海はローマ帝国の内海で、地中海地域はローマの中原とも言える。広域交易は主に大口取引で、オリーブオイル、葡萄酒、皮革、食塩などであり、一般生活用品の取引は各域内小経済圏にとどまる。各小経済圏は広域交易網の構成部分となり、その域内の物品供給が相互依存していないため、固定した交通網による交易に頼る必要がない。したがってローマ帝国の広域交易網が断裂しても、再整合の必要性もそれほど強くない。

【秦漢帝国】：安定した交通網で広域経済圏を支える

中国では戦国時代以来、すでに広域交通網が形成されてきた。幹道、支線および河川航路による安定した交通網が編み出され、漢代の大都市すべてがこの交通網上にあり、広域経済圏が形成された。精耕農業と家庭内手工業（男耕女織）という生産体系が形成され、農家から市場までの物流は安定した交通網によって支えられてきた。経済網は一旦形成されると拡張できるが、分解しにくい。いくつかの地域ネットワークに分裂されても整合できる。中国歴史上、政権が分裂した時、経済の再整合は政権統一よりも早い。

総じて、秦漢帝国においては文化圏と経済圏が重なり、補強しあい、強い結集力を示してきた

が、ローマ帝国の安定性は秦漢帝国ほどでない。ローマ帝国の滅亡後、欧州、中東、北アフリカなど多文化、多民族の列国体制に分裂した。

3.3 唐帝国とイスラム帝国⁽⁴⁵⁾

同時代に存立していた唐帝国とイスラム帝国は、政治単位であると同時に、それぞれ一つの文化圏でもある。ここでは、社会構造、統治体制、学術文化や思想などにおける両帝国の異同を確認してみる。

①社会構造

【イスラム帝国】：イスラム教徒と異教徒が不平等である

イスラム世界はムハンマドによりアラビア半島の新興教派から広大な帝国となった。ムハンマドの後継者である四大カリフは実質上宗教教主で、その政治的権威は副次的なものである。四大カリフは選挙権のあるイスラム教徒によって選出されたのであり、選挙権は最初ムハンマドのメッカとメディナでの信者のみがあったが、後にイスラム教に帰依したアラブ系の人びとにも付与した。

ウマイヤ朝（661-750）における社会階層は、上位からアラブ系イスラム教徒、他民族のイスラム教徒、未帰依の一般外族、奴隸という順となっている。王位を継承したアッバース朝はウマイヤ朝の支配階層であったアラブ人の特権を廃止し、改宗した異民族にも課せられていたジズヤ（人頭税）を異教徒のみに課し、すべてのイスラム教徒を平等に扱った⁽⁴⁶⁾。しかし、イスラム教徒と異教徒間の不平等が依然として残った。

【唐帝国】：編戸齊民により階級分化を抑制する
宗教性の強いイスラム世界と異なり、中国は「天下」国家である。中国古代の周王朝時代では天は命（＝令）を降し、天命を降ろされた王には徳があると考えられていた。戦国時代、徳の衰えたものは「天下」を失い、新たに天命が降ると説明し始め、天下の内、王の領土外の野蛮地に王の徳のめぐみが及ぶことも論じられるようになって

(45) 『萬古江河』（pp.202-208）「4 東アジアの中国（2世紀～10世紀）」による。

(46) 成美出版編集部（2006）、p.58による。

た⁽⁴⁷⁾。この3000年伝統を持つ「天下」(All-under-heaven)概念に3つの意味が含まれている。第一に「地球」(the Earth)である。すなわち天の下にある全世界である。西洋の「宇宙」(the universe)あるいは「世界」(the world)にほぼ等しい。第二の意味は、人民の心(the hearts of all peoples),あるいは民心(the general will of the people)である。第三の意味は政治的あるいは倫理的な意味で、世界政治制度,あるいは世界的普遍システム,世界は一つの家族のようなユートピアである⁽⁴⁸⁾。つまり「天下」観念にすべての民が平等である理想があるのだ。

唐以前,戦争で生じた南北朝時代の不平等は数百年の摩擦・融合を経て徐々に解消され,唐代は基本的に漢代の編戸齊民という社会構造に戻った⁽⁴⁹⁾。唐は民衆の生活を保証するための均田制を実施していた⁽⁵⁰⁾。唐初期,胡・漢族間の差別

がすでになくされ,唐代中期以降,旧家大族の優勢も抑えつつあった。科挙で文官に昇進した儒生は新たな士大夫階層を形成できた⁽⁵¹⁾。この階級昇進ルートは開放的であるため,富や社会地位の違いで,貧困層子弟は貴族子弟に対抗できないにしても,階級分化はイスラム帝国ほどでなかった。

②統治体制

【イスラム帝国】:分治から中央集権へ

四大カリフ時代の統治体制が緩く,ウマイヤ朝は分治となり,アッバース朝は中央集権に変わった。四大カリフ時代,征服された各地は納税の義務以外,それぞれ統治の自主性があった。ウマイヤ朝の統治方法もほぼカリフ時代のそれを継承した。帝国民はいくつかの省に分けて統治され,各省は独自の伝統に基づき行政を行った。つまり「分治」である。アッバース朝では中央集権が進み,アッバースは宗教権,司法権,軍事権,行政権をすべて掌握した。

【唐帝国】:中央集権

た。そして,その井田制以来の理念と系譜を継いだ先に,五世紀末の北魏に形をなし,隋唐において整った均田制があった。隋唐の均田制に対応するのが租・庸(力役)・調の税制である。均田制の詳細について,気賀澤(2020, pp.164-168)に参照されたい。

(47) 平勢(2020, pp.480-481)は「天命と徳」について,次のように説明している。中国古代の周王朝時代では天は命(=令)を降すと考えられていた。天命を降ろされた王には徳という呪力・霊力があつた。戦国時代,徳は王を名のための基礎資格(後により広い意味の人格)を意味するようになった。徳をもって殷(商)が「四方」を征したという説明も変わり,天下の内,王の領土の外の野蛮の地に王の徳の恵みが及ぶことが論じられた。征伐によって域内にもたらされた徳は官僚制の下で,自らからの征伐なしで及ぼされ,勢力均衡の下,他の国家領域にも征伐なしでもたらされるものとなった。始皇帝の統一で,王あらため皇帝の領土がそれまでの天下に等しくなった後,やがて徳は野蛮の地の説明にひきずられてそれまでの天下の外に及ぶことが論じられることになった。

(48) この「天下」概念の3つの意味についての説明は,Callahan and Barabantseva, eds. (2011, p.22)による。原資料が未入手のため,小野進(2020)より転載。

(49) 気賀澤(2020, pp.227-229)によると,唐の編戸とは戸籍に登録された農民のことである。官僚や仏教道教的僧尼,外国人などはこの編戸に計上されていない。また戸籍漏れの者もいた。

(50) 気賀澤(2020, pp.164-168)によれば,王朝の一元的な支配体制の正統性をどこに求めるかが,古来為政者の最大の課題であった。そこから民衆の生活=再生産を保証することこそが権力の公的責務という政治思想が生まれ,その理想型として,上古周代に行われたとする井田制,一家100畝の私田を分与する土地制度が儒家によって提示され

(51) 小島(2021, p.397)は科挙について次のように解説している。「科挙は国家公務員(上級職)採用試験である。正しくは「選挙」という。もともと漢代に人材登用のため「郷挙里選」(郷に挙げ里に選ぶ)を行ったことに由来し,六朝時代の九品官人法を経て,隋の時に筆記試験による方式が始まった。進士・明経などいくつかの「科」があったため,俗に科挙と呼ばれる。唐の後半から進士科出身者が政界を牛耳るようになり,宋では政府首脳のほとんどがその合格者で占められていて,宰相の子も進士に合格してはじめて宰相に昇進できるようになる(呂夷簡・呂公著父子,史浩・史弥遠父子など)。三年に一度の試験における合格者数は多くて500人なので,全国の同じ年の男子のうち100名余りしか進士になれなかった計算であり,単純な人口比で約10000分の1,実際に受験を志した中でも1000分の1程度の合格率にすぎなかった。それでも,このエリートコースを中心に当時の政治社会秩序は構成されており,その社会的・文化的意義はきわめて大きい」。

唐の支配体制は隋から継承されたものである。皇帝は天命を受けて、文官システムの補佐で天下を管理する。文官を中心とする行政の中核は、隋初に確立した三省・六部である⁽⁵²⁾。中央政府では政策決定、執行、監察という三権分立の体制を取ったが、司法権は皇帝のみに対して責任を負う。宗教として仏教と道教を共存させていたが、主流文化は儒家思想である。中国にはイスラムのような宗教権が存在せず、国教である道教の道士でさえ、仏教の僧侶とともに礼部の管轄を受ける。

③学術文化

両帝国とも開放的な社会で、外来文化や他民族に対して包容力があり、多くの異文化を吸収して、輝かしい学術文化を育てあげた。

【イスラム帝国】：イスラム教はアラビア砂漠の宗教だったが、ペルシアの祆教（筆者注：ゾロアスター教）、キリスト教、ユダヤ教の教義を吸収し、一神教となった。帝国の拡張過程でイスラム政権はギリシャ、ペルシア、インドの文学、哲学などの学術著作を大量にアラビア語に翻訳し、アラビア語を豊かな言語にした。アラビア文化は天文学、数学、歴史学、文学などにおいて成し遂げた成果が敬服に値するものである。

【唐帝国】：インド文化は仏教とともに中国に伝わったのみでなく、中亜の祆教（筆者注：イランのゾロアスター教）、摩尼教、キリスト教も外国商人とともに中国に進入してきた。唐は儒教を主流文化としながら、北方胡人や他の外国からも文化を吸収した。唐詩は中国詩の最高峰であるのみならず⁽⁵³⁾、唐帝国は絵画と書道、彫刻と石刻、音楽と舞踏などの芸術においても輝かしい成果をあげた⁽⁵⁴⁾。

また、唐の社会は開放的で外国人を多く登用し

た。高麗人の将軍（高仙芝）、ベトナム人の宰相（姜公輔）がいたし、日本人の晁衡（阿倍仲麻呂）も諸官を歴任した。唐と同様に開放的なアッバース朝も各族から人材登用していた。

④思想の核

中国とイスラムという2つの文化は、膨大な人口を取り入れ千年も持続できたが、その思想の核が大きく異なる。

【イスラム】：人より「神」に頼る

イスラム文化において、アッラーが世界創造主で唯一絶対的な存在である⁽⁵⁵⁾。人間はとても卑下な存在であり、唯一の神に無条件に服従しなければならない。一神教であるため、本質的に排他的である。

【中国】：神より「人」が大切である

儒道合一是中国秩序の中心思想であり、「人」は尊い存在である。「儒教は世を治め、仏教は心を治め、道教は身を治める」⁽⁵⁶⁾。

総じて、イスラム帝国と唐帝国とも多文化を包容してきたが、その統治体制や社会構造、思想の核においてかなり異なる。イスラム帝国と比較して唐帝国の統治体制がより中央集権であり、その階級格差もより小さい。イスラム文化において、人間が卑下な存在であるのに対して、中国思想の核が神より「人」におかれている。

文化圏の安定性から言えば、やはり中国はより安定であろう。イスラム文明圏は成立の初めから前面にヨーロッパ文明圏、背面にインド文明圏との対立抗争を余儀なくされた。つまり対等もしくは優位の近接文明圏と不断の抗争を強いられていた⁽⁵⁷⁾。これは、中国文明圏ほど安定的でなかった理由の一つであろう。

⁽⁵²⁾ 気賀澤（2020, pp.152-156）によれば、唐の皇帝の下に、尚書省（行政）、中書省（詔勅の起草・政策の立案）、門下省（詔勅の審議）の三省がある。尚書省の下に、吏部（文官人事）、戸部（財政）、礼部（文教）、兵部（兵事）、刑部（司法）、工部（土木）の六部がある。

⁽⁵³⁾ 『中華文明史』（第3巻）、p.325。

⁽⁵⁴⁾ 『中華文明史』（第3巻）、p.359。

⁽⁵⁵⁾ 岩木（2016）によると、イスラムの基本は「六信五行に集約されている。六信とは、信ずるべき六項目であり、アッラー・天使・啓典・預言者・来世・運命（予定）である。五行は五柱とも呼ばれ、行われるべき五項目であり、信仰告白・礼拝・喜捨・断食・巡礼である。六信について、アッラーとは世界の創造主で唯一絶対的存在である」。

⁽⁵⁶⁾ 葛兆光（2021）、p.118。

⁽⁵⁷⁾ 溝口（2004）、p.107。

4. 再び、中国とは何か

4.1 安定した伝統中国文化圏

世界の4つの古代文明のうち、中華文明は途中で絶えたことのない唯一の文明である⁽⁵⁸⁾。『萬古江河』を読んで、その理由は伝統中国文化にあることが理解できる。伝統中国文化圏が長期安定できたのは、①地理的な環境、②広域経済圏、③中国文化の特質によるだろう。これらの条件がすべて整えたことで、広域において安定した文化共同体が構築できたと考える。

①地理的な環境⁽⁵⁹⁾

中国で乗り越えない地理的な障壁がないため、種々の文化が接触することが可能となり、中華文明は広大な範囲で展開された。また地域的な自然災害によって全体が消滅するという事もなくならなかった。ところで、他の3つの文明は比較的に狭い範囲で展開され、移動の余地が大きくなり、一旦異民族の侵入と戦争による破壊、また甚大な自然災害があると、継続と回復が困難である。

②広域経済圏

広大な中国地域で安定した交通網も構築できた。この交通網の支えで精耕農業と家庭内手工業という生産体系に基づく経済圏が形成された。北方の遊牧民族が中国に進入してくるのも、食料確保のためであるがゆえに、同一経済圏に組み入れられた。政権が分裂しても経済の再整合が政治統合よりも先に進んで、中華文明が再生される。

③中国文化の特質

中国文化圏の内部が排他的ではなく融合的な文

化特質をもつため、文化圏も経済圏に重なり、安定と持続的な共同体を保つことができた。漢字のもつ象形と表意などの働きは、漢字を各方言地域の人々のコミュニケーションの手段とし、各民族が交際する道具ともなれた。二元融合の宇宙観には対立という矛盾を溶解する力がある。「儒仏道合一」という主流思想の下で、いかなる宗教も他の宗教や思想を超越する絶対唯一の存在でなくなった。また「儒仏道」の共存は、強い宗教勢力による政権分裂を防ぎ、人びとへの精神的な抑圧も抑えられた。文官統治の郡県制は中央集権的な政治体制を支え、「編戸齊民」という社会構造や科挙による開放的な階級昇進ルートが階級格差を抑止し、安定した共同体の構築に貢献した。ほか、「天円地方」（天は丸く、地は方形）の天下観とそれに基づく朝貢体制も、中国文化圏の特質の一つに数えられるだろう⁽⁶⁰⁾。許倬雲は政治が「すでに多く語られてきた」ため、朝貢体制について多く語っていなかったが、この国際関係の「柔構造」が、周辺国を中華文明圏に取り入れながら、「中心国と周辺国、あるいは周辺国同士の相互間を、相互不可侵、相互内政不干渉という関係に導いた」⁽⁶¹⁾。

4.2 何を継承し、何を取り入れるか

清王朝の倒壊は王朝の更迭ではなく、2000年余り持続してきた王朝体制の歴史を終結させた⁽⁶²⁾。中国が混迷に陥ろうとしている19世紀半ばに、外部から資本主義（帝国主義）が市場の占有をめざして侵入し、中国の政治、社会、経済にさらなる混乱をもたらした。またそれは、中国にとってはまったく異質な原理（適者生存、弱肉強

(58) 世界の4つの古代文明とは、ナイル川流域のエジプト文明（前4000年前後）、ユーフラテス川とティグリス川の間のメソポタミア文明（前4000年前後）、インダス川とガンジス川流域のインダス文明（ハラッパー文明とも言われ、前2300年から前1750年あたり）、黄河と長江流域の中華文明を指す（『中華文明史』第1巻、p.4）。

(59) 地理的な環境の重要性について、『萬古江河』のみならず、『中華文明史』（第1巻、p.4）も儒教学者の溝口（2004、pp.107-108）も同意見である。

(60) これは葛兆光（2021、p.119）と溝口（2004、pp.107-108。）の指摘である。

(61) 溝口（2004）、pp.107-108。

(62) 清王朝の倒壊理由について、許倬雲（2009、p.120）は君臣倫理を主奴に下げたという満清統治による伝統中国文化への侵食や湘軍・淮軍という地方軍事力の出現、帝国主義の侵入による圧力などに求めたが、溝口（2004、p.112）は官製のはずの保甲組織（郷村の自衛組織）が省単位の自治的な公局になった湘軍・淮軍こそが清王朝を内部から崩壊させた鬼子だったと強調している。

食)をもった、しかも中国に優位すると自覚された、西欧近代文明という名の異文明の侵入を伴った⁽⁶³⁾。

この異文明の圧力に直面した当時の中国知識人たちは、王朝に代わるどのような政治・国家体制を樹立するか、知識人と民衆がどのような関係にあるべきか、外部から教育と技術を導入していかにして富強になるかなどをめぐり論争を繰り広げた。中国を救うために多種多様な処方箋が出された。これらの知識人グループや処方箋を、許倬雲は『我者と他者』に次のようにまとめている⁽⁶⁴⁾。

①中国經典から変革の方向性を模索する文学者、
②「中学為体、西学為用」(中国文化を保持しながら西洋から学ぶ)の折衷派、
③日本の明治維新のように、西洋から武器産業や生産技術、典章制度などを導入する維新派、
④キリスト教の形を借用しながら民間宗教を用いて民衆動員する太平天国革命、
⑤民族国家および民主政權という近代国家体制の樹立をめざす孫文の国民党革命、
⑥社会主義の立場から近代国家体制の樹立をめざすのみならず、資本主義の弊害も克服する共産党の社会革命、
⑦教育、学術の面から西洋化し、中国文化を否定する文化革命である五・四運動、
⑧社会革命の弊害を正し、方向を変えて経済を発展させることで中国を貧弱から救い出す。これは国民党が台湾で推進した経済発展と鄧小平が大陸で行われた改革開放である。

これらの主張や試みは相互に排斥もしていたが、「資本主義(帝国主義)、西欧文明の多くの介入を身に刻まれて予期せざる変形を受けながら、しかし、否定的にせよ継承すべきは太く継承して、中国は中国として再生した」⁽⁶⁵⁾。では、中華民国、中華人民共和国として再生した中国は、西欧文明の何を身に刻まれ、伝統中国から何を継承したか。

①工業化による広域経済圏の再構築

市場の占有をめざして侵入してきた資本主義帝国によって、まず破壊されたのは伝統中国経済網

である。アヘンの輸入およびその後の西欧近代工業製品の大量輸入は、中国の貿易黒字を赤字に変え、中国経済の失血を引き起こした。最も深刻だったのは伝統中国経済網を崩壊させる寸前に追い込んだことであろう⁽⁶⁶⁾。東部沿海地域および内陸河川沿いに建設された近代鉄道と航運は、上海や漢口などの新興都市を外部経済と接続する拠点にした。農村と都市と接続して交易していた伝統中国交易網が切断され、農村地域(特に内陸部や辺境地域)は切り捨てられて、貧困に喘いだ。

中国近現代経済の工業化は、確かに都市と農村の格差を拡大させた。しかし、格差の拡大に伴いながらも、工業化による国内統一市場の構築は確実に進んだ。清朝の洋務運動から人民共和国の「四つの近代化建設」まで、中国各政権は断続的な戦争と政治混乱の中でも工業化する努力を惜しまなかった。失敗に終わった毛沢東の大躍進は工業化を推進する焦りの表れだとも言える。その結果、従来からあった内陸河川と道路による交易網に加え、中国では鉄道や高速道路による輸送などは急速的に伸長してきた。清末に東部沿海地域にのみ建設された鉄道線は、2006年にチベットなどの高原地域まで伸びてきた⁽⁶⁷⁾。この高原鉄道建設は1999年に打ち出された西部大開発計画の一環である⁽⁶⁸⁾。西部大開発計画は、鄧小平の改革開放政策により急速に工業化された沿海部地域から取り残された西部地域を国内統一市場に組み入れるためのものである。2020年に習近平が打ち出した「双循環」経済モデルの中の「主体とする国内大循環」も、工業化による国内統一市場のさらなる強靱化をはかる意図であろう⁽⁶⁹⁾。もち

⁽⁶⁶⁾ 許倬雲(2009), p.124。

⁽⁶⁷⁾ これは2006年に全面開通された青蔵鉄道である。青蔵鉄道は西部大開発計画の代表的なプロジェクトの一つで、青海省西寧とチベット自治区首府ラサ(ラ薩)を結ぶ高原鉄道である。

⁽⁶⁸⁾ 西部大開発戦略の構想について、武(2001)を参照。https://soka.repo.nii.ac.jp/record/36922/files/sou-daichugokuronsyu0_4_4.pdf, 2023年9月30日閲覧。

⁽⁶⁹⁾ 双循環という概念は、2020年5月14日に中国共産党中央政治局常務委員会において提起されたものである。その内容は次のようにまとめられる。「双循環とは、国内循環を主体とし、国内と国際の2つの循環が相互に促進する新たな発展戦略の」

⁽⁶³⁾ 溝口(2004), pp.112-113。

⁽⁶⁴⁾ 許倬雲(2009), pp.122-123。

⁽⁶⁵⁾ 溝口(2004), p.113。

ろん経済のグローバル化という国際環境の下で、「双循環」は中国経済を国内統一市場に限定されるものでなく、むしろ国内市場と国際市場と接続するための発展戦略である。

②西洋式教育システムと科学技術の導入

工業化による経済圏の構築は、教育と科学技術の支えがなければ実現できない。中国伝統的な知識人は直接生産活動に関与しないため、学問と実用的な技術との間に刺激しあうシステムが欠落していた。これは明代以降、中国が工業化に遅れた理由の一つであるかもしれない⁽⁷⁰⁾。科挙による文官選抜システム下で、知識人は儒学で出世しようとし、実用的な知識を獲得することに熱心でなかった。清末に科挙が廃止された後、中国はより実用的な西洋学問を学習する近代学校が導入され、西洋や日本に多くの留学生を送り出し、西洋思想や技術を大量に取り入れた。毛沢東時代のソ連からの技術支援、鄧小平時代の外国直接投資に伴う技術導入を経て、生産技術が飛躍的に進歩した。2010年中国の経済規模（GDP）が世界第2位に上り詰めた背後に、製造業の躍進があった。中国製造業の規模は2010年に世界一となり、主要工業製品500種類のうち、40%以上の製品の生産量が世界一であった⁽⁷¹⁾。中国は第二次産業のGDP（2022年名目）に占める割合が39.9%である工業大国に成長した。技術レベルもキャッチアップから先端技術の開発段階に進んできて、近年、米中間で激しい半導体競争が繰り広げられるほどであった。

↖ ことである。これは、中国の発展段階・環境の変化に基づいて提起されたものであり、中国の国際協力と競争の新たな優位性を再構築するための戦略的選択である」（関志雄「中国の新たな発展戦略となる「双循環」」RIETI（経済産業研究所）、<https://www.rieti.go.jp/users/china-tr/jp>, 2023年9月30日閲覧）。

(70) 『萬古江河』p.300。

(71) 中国工業・情報化部の発表による（人民網（日本語版 2021.9.14）、<http://j.people.com.cn/n3/2021/0914/c94476-9896382.html>, 2023年8月2日閲覧）。

③「中華民族」は「民族」か、それとも「天下」か

1912年に成立した中華民国は、近代的民族運動に立脚しながら「五族共和」で多民族を束ねて一つの民族として統治しようとした⁽⁷²⁾。毛沢東も1949年9月の政治協商会議開幕時に宣告したのは「中国人民は立ち上がった」のであって、「社会主義は立ち上がった」のではない⁽⁷³⁾。つまり、孫文と毛沢東は民族主義で近代国民国家（ネイション・ステイト）を建設しようとしたのである⁽⁷⁴⁾。多民族を一つの中華民族として束ねて国家を構築する方向は、「聚異為同」であり、これはヨーロッパ諸族がカトリック教の秩序から脱出するために自らの祖先ルーツを求める方向と真逆である。中国は秦漢帝国以来、構築してきた「中国」という概念が多くの異民族文化を包容してきたため、この「天下」中国に西洋の狭い「民族」を当てはめる必要がないと、許倬雲はいう⁽⁷⁵⁾。

中国には「中華民族」が必要か。中華民国、中華人民共和国は建国時、外来の「帝国主義」に対

(72) 五族共和は、1912年元旦に中華民国が成立した際に孫文が南京で行った中華民国臨時大統領就任演説でも掲げられていたスローガンである。この臨時大統領就任宣言において、「国家の根本は、国民にある。漢・満・蒙（モンゴル）・回（ムスリム）・蔵（チベット）の諸地を合わせて一国とし、漢・満・蒙・回・蔵の諸族を合わせて一群とする。これを民族の統一」と孫文は述べている。孫文の「臨時大統領就任宣言」の日本語訳は、深町英夫編訳『孫文革命文集』（2011, pp.142-149）に収録されている。

(73) 「中国人民は立ち上がった」は1949年9月21日に、毛沢東が中国人民政治協商会議第一回全体会議で述べた開会の言葉である。本文は中国共産党中央委員会毛沢東主席著作編集出版委員会編纂『毛沢東選集』（第五巻）北京人民出版社、1977年の日本語完訳版『毛沢東選集』（第五巻）外文出版社、pp.3-8に収録されている。

(74) 人民共和国が孫文の建国理念を継承して建国されたことは、中華人民共和国が1949年建国から社会主義国家への移行まで1953年間の、建国記念日10月1日に発刊された人民日報のトップページに掲載されている人物肖像からも伺える。1949年は主席の毛沢東と5名の副主席の肖像、1950年から1953年は孫文と毛沢東の肖像が並んでいた（『猫妙妙』が2023年10月1日WeChatに投稿した1949年から2023年間の人民日報トップページ合集による、2023年10月6日閲覧）。

(75) 『萬古江河』pp.406-407。

抗するために、人びとに強い一体性意識を求めた。今日に至って、人民共和国は依然として「中華民族の偉大なる復興」だと謳って、「中華民族」を強調している⁽⁷⁶⁾。しかし、「一帯一路」とほぼ同時期に謳いだした「中華民族の偉大なる復興」の「中華民族」とは、一体どういう意味なのか⁽⁷⁷⁾。これは、近代国民国家として人びとに国民の一体性の意識を共有させるための「西洋の狭い民族」なのか、それとも習政権の提唱する「人類運命共同体」からイメージする伝統「中国の広い天下」なのか⁽⁷⁸⁾。おそらく両方だろう。人民共

和国は国家統一を維持するために、人びとに国民の一体性の意識を涵養させる代替できるものが見つかるまで、「民族」が必要だと考えているようだし、「天下」思想も中国に住む人びとの意識から決して消滅したわけではない。ただし、「民族」を強調しすぎて民衆間で強い排外的な感情を引き起こしてしまうこともしばしばある。それに対して、「天下」思想は今日のグローバル化にもつながる発想である。この思想に、地球大的な発想の価値観を共有し、国境にとらわれない文化活動や経済活動を展開していく可能性が潜んでいるからだ。

(76) 「中華民族の偉大なる復興」は、2012年11月29日、習近平が国家博物館「復興の路」展示を参観した際、「中華民族の偉大な復興を実現することこそが中華民族の近代における最も偉大な中国夢だと、私は考える（我以為實現中華民族的偉大復興就是中華民族近代最偉大的中國夢）」と習が語ったことに由来する。（習近平「承前啓後 繼往開來 繼續朝着中華民族偉大復興目標奮勇前進」（2012年11月29日）、新華網、http://news.xinhuanet.com/politics/2012-11/29/c_113852724.htm, 2023年9月28日閲覧）。

(77) 「一帯一路」構想（Belt and Road Initiative）とは、2013年にカザフスタンを訪問した習近平によって提案されたものである。「一帯」は中国の西側から中央アジア、欧州に通じる陸上地域一帯であり、「一路」は東南アジアからアフリカの東海岸までに通じる海上ルートである。その後、対象地域は拡大しつづけ、東、中央、東南アジア、中東、アフリカ、東欧、南米も含む世界全体に広がっている。2020年11月時点で、中国が協力枠組みの協定を結んだのは138カ国、30の国際機関であるが、公式な国のリストが存在せず、銀行や国際機関等は70カ国程度という数を上げることが一般的である。なお、米国、日本、インドはこの構想に含まれていない。欧州はこの構想に好意的であるが、フランスやドイツは中国の市場開放が先としている。一方G7の中ではイタリアが2019年にこの構想に参加している（岡本信広「「一帯一路」構想の動向」（2022年3月8日）、RIETI（独立法人経済産業研究所）、https://www.rieti.go.jp/jp/special/ebpm_report/018.html, 2023年9月30日閲覧）。

(78) 「人類運命共同体」（a Community with a Shared Future for Mankind）には明確な定義はない。2012年の中国共産党第18回大会の報告で初めて提起されたが、その内容の説明はなかった。その名前のとおり、「地球は1つであるから人類は運命を共にしている、全人類の平和や安全、繁栄のために協力しよう」といった趣旨であろう。2017年3月に採択された国連安保理決議2344に「人類運命共同

④政党国家体制による統治

1912年の中華民国、1920年代の国民政府、1949年の中華人民共和国のいずれも、伝統君主制ではなく、主権が「民」にある政治体制の構築をめざしていた。しかし、幾多の紆余曲折を重ねながら、孫文の提示した「訓政」段階を踏んで、蒋介石と毛沢東が確立したのは、政党国家体制（党国体制）と党軍という仕組みである⁽⁷⁹⁾。これは、一部のエリートが「人民を先導する」党理念の下で、党が軍の支えで、政権の中枢に据え、国家統治を行うものである。この統治体制は、伝統中国の君主体制に極めて似ている。伝統中国の君主は科挙による選抜された文官の補佐で天下を統治し、その権力構造は皇帝を頂点に据えたピラミッド型である。例えば清の場合、ピラミッドの下層から上層へ、一般大衆、全人口の約5%の儒

ゝ 体」の文言が入った。また、同年6月の国連経済社会理事会（ECOSOC）の決議に「a shared future, based upon our common humanity」との文言が加わった（東洋経済 Online「中国の「人類運命共同体」構想にどう向き合うか」（2023年5月29日）、2023年10月6日閲覧）。

(79) 小野寺（2023、緒言 i）によれば、近代中国において、知識人たちは国民と国家の関係、社会と軍隊の関係、民衆と知識人の関係はいかにあるべきかをめぐり論争をした。1920年代の、ロシア共産党とソ連をモデルとした中国国民党・中国共産党と国民政府、赤軍をモデルとした国民革命軍の成立は、これらの問題に一つの結論をもたらした。この時に成立した政党国家体制と党軍という仕組みが、現在の中華人民共和国と中国人民解放軍にまで引き継がれている。

生、儒生人口の約10%の官僚、数千人の高級官僚、わずか数十人の最高意思決定者となっていた⁽⁸⁰⁾。中国共産党の党国体制には皇帝がいないが、中国共産党（2019年の配置）は、上層から下層へ7名の政治局常務委員会、25名の中央政治局委員、200～300名の中央委員会、2000～3000名の全国代表大会、数千万の党員、14億人口という構造となっている⁽⁸¹⁾。2022年末時点の中国共産党の党員数は1億人に迫ってきたが⁽⁸²⁾、これは14億中国人口の7%程度で、ピラミッド型権力構造を崩すほどの人数ではない。政府はこのピラミッド型の党組織の「指導」下におかれ、行政権、立法権、司法権の三権がすべて全国人民代表大会にある民主集中制を取っている。このピラミッド型統治体制は「効率的」である場合もあるかもしれない。裕福な東部地域の財政支援による内陸貧困地域の経済開発の推進は、この体制に負うところが大きい。能力と経験本位の選抜を勝ち抜いた政治エリートによる統治は中国に経済的な豊かさをもたらしたのは事実だが、この体制は深刻な課題も抱えている。

つまり、主権が「民」にある理念はどうなったかのである。台湾は1996年に初めて総統直接選挙を実施した。大陸も限定的であれ、「民主」を試みてきた。現在は、「党内民主」、行政レベルでの「選挙民主」、「協商民主」がある⁽⁸³⁾。「党内民主」とは、個人独裁を抑制するための集団指導体制、幹部の任用選抜過程において競争的原理（公募制や投票による任用者選抜）を導入するなどである。行政レベルでの「選挙民主」は、人民代表大会代表（人代）の選出方法をさす。市レベル以上の人代は一級下の人代により間接選挙で選出され、県・市轄区・郷・鎮の人代は選挙民から直接選挙により選出される。「協商民主」について、

限定的に実施されている「民主」を補充しているという見解もあるが、一般民衆に開かれた公聴会、対話会などをさす場合もある。いずれにしても、中国の民主は三権分立で、選挙と政党を基盤にした近代西洋の代表制民主と比較して、より「限定的」であり、より「管理」されていると言える。

鄧小平は「効率的でない」近代西洋式の民主制度がまだ発展途上にある人民共和国に適さないと述べていたが、中国はより民主的になる必要があるとも認めていた⁽⁸⁴⁾。実際、香港が中国に返還された際、大陸の民主集中制と比較して西洋式寄りの民主制度を導入した⁽⁸⁵⁾。これもイギリスとの激しい攻防の結果であったが⁽⁸⁶⁾。西洋式の民主制度は西洋で2000年以上の変遷を経てきたし、その実施に伴う条件もあるはずなので、簡単に移植できるものではない。近年、世界中を席捲するポピュリズムによって、近代西洋の民主主義は危機的な状況に追い込まれ、西洋式の民主制度も種々の課題を抱えていて、まだ模索中だが、少なくとも、人類は暴力と宗教と異なる方法で、一般民衆は自分たちの集団を組織し管理するようになった。中国もまた、民主集中制と近代西洋の代表制民主の間に「中国の道」を継続的に模索する必要があるだろう。昨年、ゼロコロナ政策をめぐる起きた大規模な抗議活動は、中国の「民主」にまだ大きな改善空間が残されている証拠である⁽⁸⁷⁾。

⁽⁸⁰⁾ 許倬雲（2009）、p.137。

⁽⁸¹⁾ 川島・小嶋（2020）扉、図3による。

⁽⁸²⁾ 朝日新聞（2023年6月30日）によれば、中国共産党は2023年6月30日に2022年末時点の党員数が9804万1千人であると発表した（朝日新聞デジタル「中国の共産党員数が9800万人超に 進む高学歴化、就職にも有利？」<https://www.asahi.com/articles/>、2023年9月30日閲覧）。

⁽⁸³⁾ 川島・小嶋（2020、pp.172-175）。

⁽⁸⁴⁾ 趙紫陽によると、鄧小平は政治指導体制を改革するに非常に肯定的で、1986年政治改革の推進さえ提案していた。しかし、「三権分立」のような「非効率的」なものを反対していた（趙紫陽、バオバブ・ブー／ルネ・チアン／アディ・イグナシアス、河野純治訳『趙紫陽極秘回想録』、光文社、2010、pp.325-326）。また、鄧小平は香港基本法起草委員会に向けての談話で、「我々は10億の人口を有しているし、人民の文化素質も十分でないため、普遍的な直接選挙を行う条件が整っていない」と語ったことがある（鄧小平「会見香港特別行政区基本法起草委員会委員時講話」（1987年4月16日）は、中共中央文獻編輯委員会『鄧小平文選』（第3巻）人民出版社（1993、pp.215-222）に収録）。

⁽⁸⁵⁾ 香港の政治体制の変遷について李復屏・李博宇（2022）をご参照。

⁽⁸⁶⁾ 香港返還の際、中国とイギリス政府は香港の民主化をめぐる攻防について中園（1998）が詳しい。

⁽⁸⁷⁾ 2022年11月に中国では新型コロナウイルスのノ

このトップダウンによる政策下で私的空間が著しく圧縮され、中国経済や社会に様々な副作用が引き起こされたためだ。

⑤ 社会主義と「天」という統治理念

人民共和国の官製文明観は、マルクス主義（唯物史観）の発展段階論に根差した社会主義文明論である⁽⁸⁸⁾。つまり、毛沢東がマルクス理論を中国の特殊性に合わせて組み換え、毛沢東思想を作り出し、それを中国に適応することで中国独自の「社会主義」にしたのだと⁽⁸⁹⁾。鄧小平は計画経済への反省から、経済を発展するために市場経済を取り入れる際、こう語った。「貧困は社会主義ではなく、ましてや共産主義ではない。中国は現在の遅れた状況からすれば、どの道を歩むには人びとの生活を改善できるか。これはまた社会主義を堅持するか、それとも資本主義の道を歩むかという問題に戻ってくる。もし資本主義の道を歩むなら、中国数パーセントの人を豊かにすることはできても、90パーセント以上の人に豊かな生活をさせるという問題を解決することは絶対にできな

い。しかし、社会主義を堅持し、労働に応じた分配という原則を実行するなら、貧富の極端な格差は生まれない。あと20年、30年経って、わが国の生産が発展しても、両極分化は起こらないだろう」⁽⁹⁰⁾。つまり、鄧は社会主義でも生産力を発展するために市場経済という手段を使ってよいとし、所得分配によって極端な貧富の格差を抑えることこそが、社会主義の本質だと認識していた。その後1987年に趙紫陽は「社会主義初級段階」論を発表し、中国はまだ「社会主義の初級段階にある」として、生産力発展のために市場経済の導入を正当化した。中国は「社会主義」という看板を下ろさずに今日に至った。ただし、改革開放後の中国は社会主義か資本主義かに関する論争が今でも続いている⁽⁹¹⁾。

中国は社会主義か資本主義かについて論争が絶えないにしても、格差を抑制する官製社会主義文明論は、外来のマルクス理論に基づくものだと一般的に考えられている。しかし、「社会主義システムは中国にとって外来のものではなく、自生的なものであり、マルクス主義はそれを理論化するうえでの、またそのいわゆる階級闘争の理論により革命を実践するうえでの、大きな刺激的媒介にすぎなかった」と、儒学者の溝口は主張する⁽⁹²⁾。

ㄨ 感染拡大を封じ込めるゼロコロナ政策に対し、抗議活動が広がった。政府高官と医療専門家らはその数週間前から、ひそかにゼロコロナ政策の解除計画を策定していた。2023年3月に通常の状態に回帰すると宣言することを目指し、22年末に向けて徐々に規制を解除していくという内容だった。しかし、23年3月に首相に就任する李強は、解除はもっと急を要すると考えていた。李氏はゼロコロナ政策による経済への影響と抗議活動に対処するため、突如として解除を早める決断を下した。この結果、12月にはロックダウン（都市封鎖）や大規模検査などが突然解除され、中国経済は大混乱の中で再開することになった（REUTERS「焦点：中国ゼロコロナ転換、揺れた習氏と早期解除目指した李強氏」（2023年3月6日）、<https://jp.reuters.com/article/health-coronavirus-china-reversal-idJPKBN2V806Q>、2023年10月6日閲覧）。

⁽⁸⁸⁾ 近現代中国の文明史観について、劉傑・中村元哉（2022年）が詳しい。中村は20世紀初頭の中国知識人たちの文明と文化に関する論争をまとめ、劉傑は主にその後の革命史観などの文明史観を整理した。

⁽⁸⁹⁾ 「中華人民共和国憲法」（1982）の序言をご参照。「中華人民共和国憲法」（1982）の日本語全訳は高橋和之編『世界憲法集』（第2版）、岩波文庫、2012年に収録されている。

⁽⁹⁰⁾ これは、鄧小平は1984年6月30日に、第2回中日民間人会議日本側委員会代表団に会見するときの談話「中国特色ある社会主義を建設する」である。中共中央文獻編輯委員會『鄧小平文選』（第3巻）人民出版社（1993, pp.62-66）に収録されている。

⁽⁹¹⁾ この論争の一つとして芦田ほか著（2020）『中国は社会主義か』がある。

⁽⁹²⁾ 溝口（2004, pp.112-136）によれば、中国では、①均分相続性のため、親の財産は分割され、永続的に継承されず、所有関係は流動的であった。②17世紀以降、南方中国を中心に、宗族制と呼ばれる血縁の相互扶助組織が広がり始め、19世紀には北方中国まで及ぶようになった。また、宗族組織以外に、宗教的な秘密結社組織も非血縁関係の相互扶助組織の役割を果たした。③こういう状況を反映して、儒教官僚はしばしば「万物一体の仁」を主張し、貧富が平均化することを理想とした。19世紀半ば、広東省のある県にその地方初の紡績工場ができ、従来の家内手工業者がその圧迫を受けて暴動が起きたとき、当時の県知事はその工場の閉鎖を命じた。そのときの布告の主旨は、「万物ノ

溝口は17世紀以降、中国大陆で進行した社会システム、いわゆる伝統中国の「均」思想こそが、社会主義革命の土台であるのだと。官僚層に共有されていた儒学思想の理念（仁・義・均）は生存競争や弱肉強食を容認する資本主義的な競争原理とはなじまなかった。つまり、歴代王朝によって継承されてきた「天」の統治理念（民以食为天、均貧富、万物得其所）が、中国においては「本来的に社会主義的であり、中国人民の総体的な生存にとって軽々しくは破棄できないものである」。

この「天」の統治理念は、中国共産党にも引き継がれたようだ。「社会主義初級段階」にある中国は、鄧小平の「先富論」で経済が高度成長を遂げたと同時に、貧富の格差も拡大の一途をたどった⁽⁹³⁾。格差是正のための貧困削減は一貫して中国政府の重要課題であった。工業化による国内統一経済圏の再建において、西部大開発のための鉄道などのインフラ建設は、中央政府の財政移転により「先富」した東部沿海地域各省の財政支援抜きで語れない。中国の「絶対的貧困の問題」も、2021年中国共産党創立100周年祝賀記念式典で、習近平は「解消した」と宣言した⁽⁹⁴⁾。同年8月に「共同富裕」というスローガンを掲げ、所得格差の解消にさらに力を入れる姿勢を見せた。中国では依然として、年間所得4万元（64万円程度）以下の中低収入層人口が全人口の40%に占め、約6億人もいるからだ。李克強首相も2020年5月の記者会見で「月収1000元程度（日本円で1万7000円程度）の人民がまだ6億人いる」と発言した。この発言は、富裕層が財産を貧困層に分け与えるという共同富裕の一形態に向けての布石だという見方もある⁽⁹⁵⁾。

ㄨ 一体の仁」の立場から、「専利」（利益の独占）を許さない、というものであった。

⁽⁹³⁾ 中国の改革開放後の地域格差について、李复屏（2004）による詳細な分析がある。

⁽⁹⁴⁾ JETRO「習国家主席、共産党創立100周年演説で小康社会の全面的完成をあらためて宣言」（2021年7月1日）、JETRO ビジネス短信、<https://www.jetro.go.jp/biznews/2021/07/272c39bdd863549c.html>、2023年9月30日閲覧。

⁽⁹⁵⁾ これは、2020年5月28日に全人代閉幕後の記者会見で李克強首相が言った言葉だが、李克強が言った「6億人」というのは、国家統計局が2014

⑥「社会」（大家）か、個人の「自由」（小家）か
「均」を理想とする社会主義的な「天下」中国。「没有大家哪来小家」（大家庭がなければ、小家庭も存立できない）というようなセリフは、今日の人民共和国でもよく聞かれる。このセリフには、往々にして社会利益のために個人の「自由」を制限すべきという意味が含まれている。このようなセリフを口にする人びとは、新型コロナウイルスで上昇し続けたアメリカの死亡者数データを眺めて西洋の「自由」を鼻で笑う⁽⁹⁶⁾。

中国人には「自由」がわからないのか。かつて、外国人は「中国人は一握りのバラバラな砂であって団体を有していない、と言いながら、他方では、中国人には自由がわからぬ、と言った」のであり、この外国人の批評が「みづから矛盾におちいった」と、孫文は指摘する⁽⁹⁷⁾。「自由」という呼びかけに対して「バラバラな砂」で反応しない中国人のことを、孫文は次のように説明した。「ヨーロッパの人民が自由という言葉聞いてすぐわかったことは、中国人が「発財」（金をもうけること）という言葉聞くのと同じで、みんなの気持ちの中では、たいへん大事なことに考えられていた」。それは、「当時ヨーロッパの君主専制が極点にまで発展していたから」であり、「中国の歴代の人民が受けた専制の苦しみよりもはるかにひどかった」からだ。「ヨーロッパの二百余り

ㄨ 年から指している低収入層および中間層底辺、すなわち中低収入層の人口群である。しかも、これは「コロナで困っている人に対する政府の対応」に関する質問を受けての回答だったので、「困っている人がこんなにいるのだから、大富豪たちは財産を困っている人たちに分け与えなければならない」という共同富裕の一形態に向けての布石も含まれていただろうと、遠藤誉はこう分析する（遠藤誉「中国「月収1000元が6億人」の誤解釈」、Yahoo ニュース（2021年11月9日）<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles>、2023年9月30日閲覧）。

⁽⁹⁶⁾ 新型コロナウイルスは世界で拡大していく時期、WeChat など中国の SNS 上、アメリカの「自由」を嘲笑する言説が溢れていた。

⁽⁹⁷⁾ ここで引用されている孫文の言葉はすべて孫文の「民権主義」の「第二講 民権と自由」による。この講義は孫文著、安藤彦太郎訳の『三民主義（上）』（1957年、pp.169-191）に収録されている。

年来の戦争では、民権を争うとはいわず、自由を争った」。それに対して、中国では、「人民が皇位を犯さぬかぎり、かれらが何をしてもし皇帝としてはおかまいなし」だったのであり、「人民は租税をおさめるほかはほとんど官吏と関係がなかった」。つまり、当時の中国人にはヨーロッパ人より自由があったため、中国人にとって「自由」より「発財」が大事だったというのである。

この孫文の「自由」と「発財」の違いを生じた理由について、マルクス経済学者の大西（2021）は西洋の「民主主義」と「東洋的専制」という視点から説明している。大西は、西洋の「民主主義」は「奴隷制、侵略性」、東洋の「東洋的専制」は「奴隷制の欠如、貢納制」とセットになっていると。つまり、西洋の「民主主義」はギリシャ・ローマの生産を担う奴隷および奴隷を獲得するための侵略を抜きにして語れない。「民主主義」は「奴隷」と「市民」の階級差から、奴隷たちが「市民」としての参政権を獲得する過程で発展してきたのである。それと対照に、東洋の「東洋的専制」は「奴隷制の欠如、貢納制」とリンクして形成されてきたのだ。東洋は、内部的均質性を壊さなかったがゆえに、奴隷を持たなかっただけでなく、多くの場合貴族層も発達させず、よってそのさらに上に立つ支配身分が超越的な政治的権利を一手に掌握するという「専制政治」を形成したのである。支配層と「政治関与を認めない」民衆との間に「貢納」で結ばれる⁹⁸⁾。大西の議論に

よれば、西洋の奴隷より相対的に「自由」な東洋の民は、政治的権利を求めるよりも重い「貢納」から脱出したいとも理解できる。

ただし、孫文はこうも言った。自由を手に入れるために多くの犠牲を払ったヨーロッパ人に対して、「もしいま、もう一度自由をとなくなても、きっと以前のように歓迎はすまい、と私は思う」。ならば、人民共和国の中低収入層の6億人はともかく別として、「先富」した一部の中国人にとって、「発財」は以前ほど魅力的なのか。彼らは「発財」以外のものにより価値を見出すことがないのか。

確かに、みずからの欲求を追求したい行き過ぎた個人の「自由」は、社会的弱者を冷遇する環境を助長し、家族、地域共同体など集団への帰属意識を薄めてしまう可能性がある。しかし、調和や徳を重視する社会は個人の価値と福祉が犠牲にされる口実だ、という批判もまったく的外れとも言い切れない。社会という「大家」と個人の「自由」との均衡をどのようにして達成できるのか。これは今日の国際社会の共通課題である。

再生した中国は、まだ「中国」なのか。

「中国文化の真の誇りは、その包容力と消化力にある」と、許倬雲はいう。この包容力と消化力で、中国は常に「他者」から必要なものを取り入れ消化してきたからこそ、中国となったのである⁹⁹⁾。中国は15世紀からすでに西洋文明と接触し始めたが、19世紀中期以降、侵入してきた異質な西洋近代文明を抵抗しながらも本格的に取り入れ、消化し始めた。西洋の教育システムや技術を貪欲に取り入れ、貧弱だった人民共和国は「絶対貧困」から脱出し、工業大国となった。それに

⁹⁸⁾ この西洋と東洋の違いを、大西（2021）の言葉で簡潔にまとめると、「西洋は征服し東洋は統一した」ということである。また、東洋的専制について、大西は次のように詳しく説明している。この「政治関与を認めない」東洋では、奴隷を認めないある種の均質主義は、人間の最低生活保障という思想と結びつきうるから、現在の中国の「貧困撲滅」による「共同富裕」を最優先した政策もその文脈で理解できる。「政治的権利は制約するが経済的利益は守るという、均質性重視の最底辺層ボトムアップに相対的焦点がおかれる。現在の中国政策がその典型なのでその例で説明すると、中国政府の定義する「人権」は生存権、教育権、勤労権、労働基本権といった社会権をベースとしており、参政権が上位にない。参政権は付与されても生存権が必ずしも保障の対象とならない西洋的考え方——その典型はいうまでもなく新自由主義のアプローチ

メリカである——との対照をなしている。これだけではない。西洋諸国が途上国を労働力供給地として利用する一方で、日本や近年の中国が途上国のインフラ建設に一生懸命なのも別種の対照として興味深い。前者は人を移動させる方式の搾取方式であるのに対して、後者は途上国の発展から余剰を吸い上げようとする方式である。

⁹⁹⁾ これは、許倬雲が『萬古江河』および『我者与他者』（2009）を通じて、始終主張していることである。

に伴い、西洋の生存競争や弱肉強食も中国で広がった。ただし、数千年も伝承されてきた「天」の思想はそう簡単に途絶えることがなく、強靱に生き残った。「天」は、人民共和国をマルクスの社会主義で薄化粧させ、共同富裕という顔をして中国で再生したのだ。しかし、生存状況が改善された14億人口の多民族人民共和国は、依然としてピラミッド型のエリートたちによって運営されているし、「大家」の中で個人の「自由」をどのように保障するかも考える必要がある。また「中華民族」は排外的な狭い「民族」に陥れず、「天下」思想をいかに「人類運命共同体」に貢献できるかという課題もある。

萬古の江河は、最終的に海に向かっていく。実際、人民共和国は「一带一路」と「双循環」で世界に向かっていく。「有給有拿」で成長してきた中国は、これから何を取り入れ、何を与えて、世界に溶け込んでいくか。これは、許倬雲が『萬古江河』の読者である「この世代の中国人」に出した宿題なのだ。

付記

本稿は、主要研究テーマを近現代中国の経済発展とする李復屏と、近代中国政治思想とする李博宇の、グローバル化する世界での現代中国の思考・行動様式を理解したいという共通の思いから生まれたものである。

研究領域はそれぞれ経済学と政治思想である著者たちにとって、中国文化史あるいは東西文明はまったく新しい学問分野である。この分野に踏み入れるきっかけを与えてくださったのは慶應義塾大学の大西広先生である。李復屏は大西先生の誘いで2022年度の日本現代中国学会で東西文明に関する議論への課題提供として『萬古江河』を簡単に紹介した。その後、同分野にも関心のある李博宇と共に入門的なテキストや関連資料を、少しずつ収集し手当たり次第で読み始めた。収集した資料や読んだ文献へのコメントなどは、クラウドにアップしたり書き留めたりして互いに共有した。日常的な雑談や議論で生まれた考えやアイデアもそのつど共有フォルダに追加した。少しずつではあったが、一年間で共有フォルダの中の文献資料とメモが一定量まで溜まってきたため、それをまとめて公表することに合意した。

原稿構成について二人で議論した結果、多分野に

またがる多くの資料を『萬古江河』のストリートを中心的な軸にして組み立て、著者たちのコメントを最後にまとめることに決めた。共同メモの文章化作業について、文章の統一感を考慮して、節や項目ごとに分担執筆するのではなく、李復屏を主筆として文章化されたものを、李博宇がメモの読み間違いや漏れなどがないかを確認しながら作業を進む形を取った。このように本稿は、研究分野の異なる者たちによる共同作業だからこそ、政治、経済、社会、思想など異なる視点から中国文化を理解しようと試みることができた。それと同時に、本稿はインターネットの技術進歩により研究教育活動の多くがクラウドに移行できたことの賜物だとも言える。

参考文献

中国語

- 鄧小平（1984）「中国特色ある社会主義を建設する」（1984年6月30日）中共中央文献編輯委員會『鄧小平文選』（第3巻）人民出版社（1993年）収録。
- 鄧小平（1987）「会見香港特别行政区基本法起草委員會委員時的講話」（1987年4月16日）中共中央文献編輯委員會『鄧小平文選』（第3巻）人民出版社（1993年）収録。
- 葛兆光著、辻康吾監訳、永田小絵訳（2021）『完本 中国再考——領域・民族・文化』岩波書店。
- 猫妙妙（2023）「『人民日報』頭版太有看頭了：1949-2023年間的国慶，一文读懂74年」WeChat（2023年10月1日投稿），2023年10月6日閲覧。
- 梁啓超（1901）「中国史叙論」。『清議報』（1901年9月3、13日）に掲載された論考，署名「任公」，梁啓超著，湯志鈞，湯仁沢編（2018，pp.310-320）に収録。
- 梁啓超著（1902）「新史学」。『新民叢報』（1902年2月8日～11月14日）に掲載された論考，梁啓超著，湯志鈞，湯仁沢編（2018，pp.497-505）に収録。
- 梁啓超著，湯志鈞，湯仁沢編（2018）『梁啓超全集』（第二集，論著二），国家清史編纂委員會・文献叢刊，中国人民大学出版社。
- 刘嘉仁，商嘉琪著（2021）「文明的统一性与多样性——“中西文明比较研究学术研讨会”综述」『史学史研究』No.182，2021年第2期。CNKI，<https://www.cnki.net>。2022年6月5日閲覧。
- 藩岳著，脇屋克仁他訳（2021）『東西文明比較互鑑』アジア太平洋観光社。
- 清華大学（2019）「清华大学校长送给新生『萬古江河』，书中都讲了些啥？」（2019年7月9日），清

- 華大学新聞, <https://www.tsinghua.edu.cn/info/1182/50096.htm>, 2022 年 10 月 17 日閲覧。
- 孫文著, 安藤彦太郎訳 (1957 年)『三民主義』(上) 岩波書店。
- 騰訊網 (2022)「苏秉琦的中国文化六大区域划分理论是什么?」騰訊網, <https://new.qq.com/rain/a/20210612A0453600>, 2022 年 10 月 6 日閲覧。
- 習近平 (2012)「承前啓後 繼往開來 繼續朝着中華民族偉大復興目標奮勇前進」(2012 年 11 月 29 日), 新華網, http://news.xinhuanet.com/politics/2012-11/29/c_113852724.htm, 2023 年 9 月 28 日閲覧。
- 新華網 (2019)「堅定“文化自信”, 須讀懂習近平這 6 篇重要講話」(2019 年 6 月 19 日), http://www.xinhuanet.com/politics/xxjxs/2019-06/19/c_1124642114.htm, 2022 年 10 月 22 日閲覧。
- 許倬雲著 (1982)『考古編』(台北) 聯經出版事業公司。
- 許倬雲著 (2006)『萬古江河』(台灣繁體字版) 英文漢聲出版股份有限公司。
- 許倬雲著 (2007)『萬古江河』(大陸簡體字版) 湖南人民出版社。
- 許倬雲 (2007)「我为何写『万古江河』」(2007 年 4 月 6 日), <http://m.aisixiang.com/data/13836.html>, (2022 年 6 月 5 日閲覧)。
- 許倬雲著 (2009)『我者与他者』香港中文大学出版社。
- 許倬雲 (2019)「文化史: 社会学和歴史学的交集」(匹茲堡大学) bilibili 動画, <https://www.bilibili.com/>, 2023 年 10 月 2 日閲覧。
- 袁行霈, 嚴文明, 張傳璽, 樓宇烈主編 (2006)『中華文明史』(計 4 卷) 北京大学出版社。
- 中国共产党中央委员会毛沢東主席著作編集出版委員会編纂 (1977)『毛沢東選集』(第五卷) 北京人民出版社。
- 閻學通著, 宋寧而・姜春潔訳 (2020)『世界権力の移行——中国の道義的現実主義の道』晃洋書房。
- 趙紫陽著, バオバブ・ブー／ルネー・チアン／アディ・イグナシアス, 河野純治訳 (2010)『趙紫陽極秘回想録』光文社。
- 日本語**
- 朝日新聞デジタル (2023)「中国の共産党員数が 9800 万人超に 進む高学歴化, 就職にも有利?」(2023 年 6 月 30 日), <https://www.asahi.com/articles/>, 2023 年 9 月 30 日閲覧。
- 芦田文夫・井手啓二・大西広・聴濤弘・山本恒人著 (2020)『中国は社会主義か』かもがわ出版。
- 天児慧著 (2021)『中国のロジックと欧米思考』青灯社。
- 岩木秀樹著 (2016)「イスラームの特徴と初期イスラームの歴史」創価大学社会学会, 『SOCIOLOGICA』Vol.40, No.1-2 (通巻 61 号), pp.109-119。
- 遠藤誉 (2021)「中国「月収 1000 元が 6 億人」の誤解釈」, Yahoo ニュース (2021 年 11 月 9 日) <https://news.yahoo.co.jp/expert/articles>, 2023 年 9 月 30 日閲覧。
- 大西広 (2021)「東洋的専制と西洋的奴隸制: 西洋帝国主義の民主主義の起源」政治経済研究所『政経研究』編集委員会編 (117) (2021-12), pp.40-53。
- 岡本隆司, 石川祐浩, 高嶋航編訳 (2020)『梁啓超文集』岩波書店。
- 岡本信広 (2022)「「一帯一路」構想の動向」(2022 年 3 月 8 日), RIETI (独立法人経済産業研究所), https://www.rieti.go.jp/jp/special/ebpm_report/018.html, 2023 年 9 月 30 日閲覧。
- 小島裕馬著 (2017)『幻の名著復刊 中国思想史』KK ベストセラーズ。
- 小野進 (2020)「儒教経済学 (Confucian Economics) が想定する新しい文明 = 世界秩序の出発点としての「天下」システム (The Tianxia System) 概念——葛兆光『中国再考: その領域・民族・文化』(2014 年)に関連して——」『立命館経済学』第 69 巻, 第 1 号, 2020 年 5 月, pp.121-153。
- 小野寺史郎著 (2023)『近代中国の国家主義と軍国主義』晃洋書房。
- 川島真・小嶋華津子編著 (2020)『現代中国政治』ミネルヴァ書房。
- 気賀澤保規著 (2020)『絢爛たる世界帝国』(隋唐時代) 講談社。
- 木村靖二, 岸本美緒, 小松久男編 (2021)『詳説 世界史研究』山川出版社。
- 小島毅著 (2021)『中国思想と宗教の奔流』(宋朝) 講談社。
- 佐野大介 (2022)「仁」湯浅邦弘編著『中国思想』ミネルヴァ書房, pp.60-61。
- 関志雄 (2023)「中国の新たな発展戦略となる「双循環」」, RIETI (経済産業研究所), <https://www.rieti.go.jp/users/china-tr/jp>, 2023 年 9 月 30 日閲覧。
- 高橋和之編 (2012)『世界憲法集』(第 2 版), 岩波文庫。
- 中国工業・情報化部 (2021), 人民網 (日本語版)

2021. 9. 14), <http://j.people.com.cn/n3/2021/0914/c94476-9896382.html>, 2023 年 8 月 2 日閲覧。
- 趙宏偉著 (2019)『中国外交論』明石書店。
- 東洋経済 Onlian (2023)「中国の「人類運命共同体」構想にどう向き合うか」(2023 年 5 月 29 日), <https://toyokeizai.net/articles/-/675144>, 2023 年 10 月 6 日閲覧。
- 武澎東 (2001)「中国の西部大開発戦略の＝構想とその始動」https://soka.repo.nii.ac.jp/record/36922/files/soudaichugokuronsyu0_4_4.pdf, 2023 年 9 月 30 日閲覧。
- 中園和仁著 (1998)『香港返還交渉——民主化をめぐる攻防』国際書院。
- 成美出版編集部 (2006)『図解世界史』成美堂出版。
- 日本国語大辞典第二版編集委員会編 (2001)『日本国語大辞典』(第二版)小学館。
- 平勢, 隆郎著 (2020)『都市国家から中華へ』(殷周春秋戦国)講談社。
- 深町英夫編訳 (2011)『孫文革命文集』岩波文庫。
- 益尾知佐子著 (2019)『中国の行動原理』中公新書。
- 溝口雄三著 (2004)『中国の衝撃』東京大学出版会。
- 李复屏著 (2004)『中国经济改革と地域格差』昭和堂。
- 李复屏・李博宇 (2022)「「一国両制」とは何か? ——原典からみる香港の「一国両制」龍谷大学社会学部学会『社会学部紀要』第 62 号, 2022 年 11 月, pp.36-57。
- 劉傑・中村元哉著 (2022)『超大国・中国のゆくえ 1

文明観と歴史認識』東京大学出版会。

JETRO「習国家主席, 共産党創立 100 周年演説で小康社会の全面的完成をあらためて宣言」(2021 年 7 月 1 日), JETRO ビジネス短信, <https://www.jetro.go.jp/biznews/2021/07/272c39bdd863549c.html>, 2023 年 9 月 30 日閲覧。

REUTERS (2023)「焦点: 中国ゼロコロナ転換, 揺れた習氏と早期解除目指した李強氏」(2023 年 3 月 6 日), <https://jp.reuters.com/article/health-coronavirus-china-reversal-idJPKBN2V806Q>, 2023 年 10 月 6 日閲覧。

英語

- Callahann William A and Elena Barabantseva, eds. *China Orders the World, Normative Soft Power and Foreign Policy*, Baltimore, The John Hopkins University Press, 2011.
- Hsu, Cho-Yun, *Ancient China in Transition: An Analysis of Social Mobility, 722-222 BC*. Stanford: Stanford University Press, 1968.
- Hsu, Cho-Yun, *Han Agriculture: The Formation of Early Chinese Agrarian Economy, 206BC-AD 220*. Seattle: University of Washington Press, 1980.
- U.S. EMBASSY & CONSULATES IN CHINA, <https://china.usembassy-china.org.cn/the-administrations-approach-to-the-peoples-republic-of-china/> (Access 2022. 6. 5).